

清末小説から 117

2015.4.1

- いくたびかの阿英目録9 樽本照雄 1
《傷心之夜》の原作..... 渡辺浩司 5
《深谷美人》 罕見林譯與《空谷佳人》譯者考辨..... 古 二 徳14
《中国通俗小説总目提要》補遺八則..... 付 建舟22
早期漢訳ドーデ「最後の授業」6 最初の漢訳虞霊「戦後」のばあい..... 神田一三30
清末小説から4、36

『民国通俗小説書目資料彙編』は、本号末尾に表紙写真を掲げました。収録される論文51本は、次号の『清末小説から』にまわします。『清末民初小説目録X(エックス)』についてお知照

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録9

樽 本 照 雄

資料から見る時代の制約

私は、阿英目録の編集方針について、次のように書いたことがある。

そのひとつは、「単行本を主として雑誌にも及ぶ」ところだ。それ以前の単行本主義から、雑誌主義に対象を拡大したところに特色のひとつがある。

あるいは、こうも説明した。

「阿英目録は、単行本を主にし、雑誌にも目配りをした。雑誌を作品採取の範囲内に含めたことにより、阿英が学術的先見性を備えていたことが証明される」

阿英目録が、新聞からまったく採録していないように受け止めれば、それは誤解だ。たとえば、『天津日日新聞』『神州日報』『時報』などが見える。数も量も少ないが、あることはある。有名なのは、李伯元作といわれる「中国現在記」が新聞『時報』に掲載されているのを発掘したことだろう。ただし、全体から見れば、充実というにはほど遠い。

収録数が少ない理由は、簡単なことだ。当時は、利用できる新聞がほとんどなかった。それだけにすぎない。雑誌まで所蔵範囲を拡大していた阿英だ。新聞に気づいていないはずはない。事実、阿英『晚清文藝報刊述略』(上海・古典文学出版社1958.3 / 中華書局編輯所編輯、北京・中華書局1959.8上海第一次印刷)には「晚清小報録」を収録する。小型新聞、つまりタブロイド版新聞だ。ただし、大型新聞は見えない。こちらの大型新聞を個人で所有するとなると、

問題がありすぎる。私は、そう考えている。

1930年代はおろか、「文化大革命」が終わったあとの1970年代も、一般には小型大型にかかわらず新聞そのものをまとめて見るができなかった。ここでいう新聞は、実物の新聞だ。影印本、マイクロフィルムの存在しない時代のことだ。新聞は、まず、図書館が所蔵しない。所蔵していたとしても揃ってはいない。原物は保存状態が悪く閲覧できるはずもない。閲覧禁止だった。日本においていくつかの日本の新聞がマイクロフィルムですでにまとまっているのを、当時の中国学界にあてはめるのは間違いだ。

1991年、上海で近代文学研究の国際学会がはじめて開催された。その機会を利用して、ある新聞の閲覧をしたいと希望を主宰者にだしたことがある。上海図書館は、そのころ昔の競馬場跡にあった。人民広場とっていたか。そこで清末の新聞を数部見せてもらった。原物のそれは、破損しており、手で触ることはほとんど無理だった。

上海図書館でそうだったのだ。新聞のマイクロフィルム化がようやく進み、料金さえ支払えば見るができるようになったのは、せいぜいがここ20年から10年前後からではないか。

2002年に済南・齊魯書社から刊行した樽目録第3版にも、できるだけ新聞から採取した。だが、不十分であることは自分でよくわかっていた。

それを私は、資料から見る時代の制約だという。古い樽目録では、新聞掲載の小説が手薄になっているとはっきりと説明している。

それ以後、中国ではいくつかの目録が出版され、一部に新聞を収録しはじめていた。

状況が変化したのを徹底的に可視化したのが、劉永文編『晚清小説目録』(上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11)だといっていいだろう。新聞雑誌単行本に3分類して収録する。単行本部分は評価の対象にならない(後述)。そこを除いて、新聞掲載の小説を多

く採録している。特色のひとつだ。ようやく、ここまでたどりついた。私は、そういう感慨を持つ。劉永文の努力もさることながら、新聞を利用できる状況が新しく生まれたことを意味している。収集に力をいれている、と私は称賛したものだ。それが、不十分であるとわかるのは2014年になってからだった。

私は、資料の制約があった時代を体験している。だから、そういう状況を知らない人が書いた文章を見ると違和感を持つ。

李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』(華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文)である。

別の論文に引用されているのを見て、該論文の存在を知った。複写を入手して読んだ。冷血陳景韓を調査して詳しい。

華東師範大学といえば、陳大康が主導して新聞小説の調査を進めていることを私は知っている。彼の教え子複数が新聞を資料に利用して論文を書いている。陳大康自身も、論文多数のほかに、単行本では『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002.12)を出した。これは、役に立つ。樽目録にも注記して取り入れた。さらに、近くは陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民出版社2014.1)という巨大な著書に成長している。このような大著が実現したのには、新聞雑誌が自由に利用できるようになった最近の研究状況の変化が背景にあることはいうまでもないだろう。

そこで、陳大康が指導して成立した李志梅論文だ。

李が主題とする陳景韓研究の現状を紹介して、従来から新聞が研究者の視野に入っていないと指摘する。

新聞は、晚清小説の重要な媒体だ。しかし、以前からずっと新聞と小説の間にあるこのような明らかに見られる関係については軽視されていた。20頁

原文で使われている漢語は「報刊」だ。一般には、新聞雑誌という意味で使われる。しかし、ここは新聞でなければ話が通じない。李は、該当個所の近くで次のようにも書いている。

新聞の小説を軽視したのは、阿英の「書目」ばかりではなく、その後の書目著作も発行された単行本を主として収録し、……
20頁

李志梅は、ここで「単行本」を使用している。ならば、「報刊」は、それと対比させているのだから「新聞」でよい。阿英目録が雑誌から採取している事実は、李も知っているはずだ。

李は、軽視されたのが新聞だとくくったうえで、さらに郭延礼の論文を引用している。

郭延礼「阿英与中国近代文学研究」(『東岳論叢』2002年(第23巻)第6期 2002.11)*²⁶である。

郭延礼は、その論文において近代文学研究史上で阿英の示した功績をみつつの方面から点検している。

すなわち、資料の整理と出版、書目の編集、研究と論著だ。ここで問題になるのが、2番目の書目である。本稿でいうところの阿英目録だ。

阿英は、原物を手にして目録を編集した。私はすでにそう紹介している。阿英目録が、研究者に信頼され高く評価される理由だ。

郭も書いている。「前人の書目、あるいは著作を参考にし総合して編集した一般の書目とは大いに違う」(125頁 / 112頁)

ここに中国伝統の目録観がにじみ出ている。中国で従来目録が軽視される理由だ。先行文献を引き写すだけで目録がつくれる、という考えである。阿英が独自に編集したことを高く評価するために、一般的な目録編集の実態を意識せずに暴露してしまったということだろう。

郭延礼は、阿英の業績全体を高く評価する。

研究に多大な貢献をしたことを絶讃する。ただし、不足がないわけではない、という。その中のひとつが新聞小説についてのものだ。引用翻訳する。

阿英の『晚清戯曲小説目』は、作品を収集したとき、近代新聞紙上に発表された小説については見逃すところがある。これは、決して阿英が近代新聞紙上に大量の小説(創作小説と翻訳小説を含む)が掲載されていることを知らなかったことを意味していない。そうではなく、近代小説の主要な媒体が新聞であるというこの新しい考え方を一定程度軽視したのだった。126頁 / 113頁

阿英は新聞小説の存在を知りながら、それを軽視したという。納得しがたい説明だ。

ならば、同じく新しく出現した雑誌についてはどうなのか。雑誌については、阿英は重視しているではないか。それが阿英目録の特色のひとつだ、と私はくり返し説明している。

新聞雑誌のふたつは、清末に新しく出現した形態だ。阿英は、その新しい雑誌掲載の小説には注目したが、一方の新聞小説は意識的に軽視したということになる。郭延礼のこの説明は、矛盾している。

阿英目録の限界について、郭延礼が指摘するその目的は、制約の存在した時代の目録について「苛酷な責任追及はあってはならない」(126頁 / 113頁)ということだ。結局のところ、阿英目録を擁護している。それはいい。だが、細部でつじつまが合っていない気がする。

李志梅が、上に示した郭延礼の文章をそのまま自分の論文に引用している。李は、「新聞意識(報刊意識)」と命名して、現在の近代小説研究にもそれが欠乏していると主張するのだ。

李志梅が「新聞意識」を強調するのは、陳景韓と新聞の結びつきを明確にしたいからだろう。

以前の研究では、その部分が十分ではないと主張している。それは、違うと思う。「新聞意識」は研究者に共通してあったが、その新聞そのものを利用できる研究環境が整っていなかった。それが事実だと私は考える。

李志梅の博士論文は、2005年に審査を通過した。その10年前に各種新聞が比較的自由に閲覧できたかといえば、怪しい。李志梅が大学院生だった時代に閲覧する環境が整っていたのだろう。指導教官の陳大康も、資料が利用できる状況がすでにあったからこそ、陳景韓と新聞小説という主題の設定に同意したはずだ。

例を示そう。陳大康『中国近代小説編年』(2002)では、新聞小説をほとんど収録しない。だが、李志梅も編集に参加している巨冊の陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(2014)では、新聞から大幅に小説を採取している。以前の陳大康に「新聞意識」がなかったとは思えない。あるにはあったが、閲覧の環境が整っていなかった。その12年間に変化したと考えるのがいいのではないか。

現在の恵まれた研究環境を当然のことにして、以前の研究者を批判することは生産的ではない。

ついでだから李志梅の博士論文について気になる部分があることを書いておく。

陳景韓は、創作よりも翻訳を多く発表したという。そうに違いない。陳景韓は日本に留学したことがある。彼の翻訳は、多くが日本語原本、あるいは日本語経由である。英語、またフランス語原著であるにしても、陳景韓が底本にしたのは、日本語に翻訳されたものだ。重訳である。

李志梅は、陳景韓が日本語訳本から転訳した(131頁)と説明はする。あるいは、「『新小説』および『小説時報』に掲載した翻訳作品について、陳景韓はほとんど原作者を注記している」(134頁)とわざわざ書いている。さらに、作品題名をあげる。「明日之戦争」「聖人歎盜賊歎」「巴黎之秘密」「火裏罪人」「土裏罪人」「虚無党奇話」「女偵探」(139頁)ただそ

れだけ。わずかに、日本の抱一庵主人の日本語訳からの重訳だというだけで終了だ。

ならば、それぞれの翻訳について扱ったその日本語訳本を明示するのが普通の研究手続きだ。ところが、それについては書かない。樽目録第3版を参照文献にあげてはいるが、参照しなかった、または無視したらしい。日本語の問題があるのだろうか。陳景韓の翻訳研究だといいいながら、底本について手を抜くのはいかがなものか。陳大康は指導しなかったのか、と思わないでもない。

そういえば、陳大康は、彼の『中国近代小説編年』(2002)あるいは、巨冊の『中国近代小説編年史』全6冊(2014)でも、翻訳の原作については、ほとんど無視している。一步も踏み込まない。李志梅は、それにならったのかも知れない。 罫

【注】

26) 郭延礼『中国文学的変革：由古典走向現代』濟南・齊魯書社2007.7にも収録

『清末小説から』第116号

2015.1.1

いくたびかの阿英目録8樽本照雄
早期漢訳ドーデ「最後の授業」5	
黄静英訳「最後之授課」のばあい	
神田一三
清末民初俄国小说译介路径综考(下)	
付 建舟
商務版「説部叢書」研究の昔と今3(下)	
改組の時期樽本照雄

清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

《傷心之夜》の原作

渡辺浩司

1

『小説時報』第二十二期(有正書局,1914.5.15)に、《傷心之夜》なる短篇作品が掲載された。書名下には“(延陵)”とあるだけで、原作は不明であった。

このたび、原作が判明したので本稿で報告する。

原作者は、Anna Katharine Green、原作は、『A Memorable Night』(初出は1887年(未見)*1、本稿では『The Old Stone House and Other Stories』(G.P.Putnam's Sons,1891年)収を使用)*2。

原作者 Anna Katharine Green は、1846年生、1935年没、アメリカの作家で、30冊以上の著作がある。初めて出版した小説『The Leavenworth Case』(1878年)がベストセラーになり、その内容が当時の女流作家にしては珍しい探偵小説だったことにより、「Mother of Detective Fiction」(探偵小説の母)等とも称される。

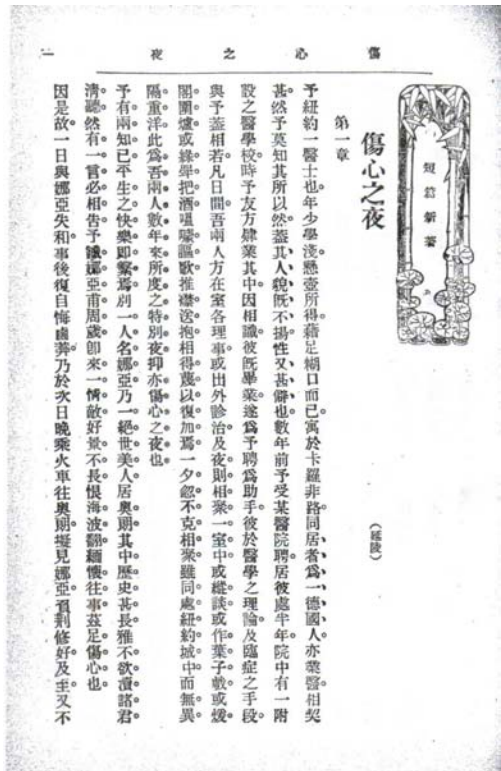
訳者“延陵”は、劉延陵で、1894年生、1988年没、原籍は安徽・旌徳。教師を勤めながら、詩人として活躍したが、1927年にシンガポールへ移住した。その後は、新聞編集者や教師として過ごした。

A MEMORABLE NIGHT.

CHAPTER I.

I AM a young physician of limited practice and great ambition. At the time of the incidents I am about to relate, my office was in a respectable house in Twenty-fourth Street, New York City, and was shared, greatly to my own pleasure and convenience, by a clever young German whose acquaintance I had made in the hospital, and to whom I had become, in the one short year in which we had practised together, most unreasonably attached. I say unreasonably, because it was a liking for which I could not account even to myself, as he was neither especially prepossessing in appearance nor gifted with any too great amiability of character. He was, however, a brilliant theorist and an unquestionably trustworthy practitioner, and for these reasons probably I entertained for him

122



2

主人公の一人称で語られる原作のあらすじを紹介する。

第一章

私(Dick Atwater)は若い医者で、以前、ニューヨークで診療していた。その診療所は若いドイツ人(Richter)と共同で開いていた。彼とはある病院で知り合い、すばらしい理論家で、医者としての腕も信頼できるので、1年間一緒にいるうちに私は彼のことを気に入っていた。夜勤は無かったので、たいていは夜も一緒にいた。

ただ一度、彼と一緒にではないことがあったが、それが今から話す夜のことである。

私は、けんかをした Dora と仲直りをしたくて、彼女の家がある Orange に行った。しかし、彼女は不在で、悪いことに彼女が翌朝、欧州へ出航することを知った。在宅していた彼女の父とは仲が良く、父から恋敵(Appleby)も同じ船に乗ることを聞き、気落ちした。だが、父に励まされ、私も同じ船に乗ることにした。出航は明朝9時。症状の重い患者を1人担当しているので、Richter に任せ、準備をすれば間に合うと考え、ニューヨークへ戻った。珍しいことに Richter は不在で、彼宛の荷物が卓上にあった。それを手にしようとした時、名前を呼ばれ、声の方を向くと入口に男が立っていた。

彼は入室し、「1時間待っていた ; Warner 夫人の容体が悪くなり、貴方の診察を希望している ; 今、もう亡くなっているかも知れない」等と訴えた。夫人は私の患者であるが、男には見覚えが無かったので、身元を尋ねると、夫人は自宅外の2番街におり、男はその家の使用人であるとのことだった。時間が無いと言って断ろうとしたが、馬車を待たせてあると言われたので、Richter に置き手紙を残し男と共に出かけた。

家に着いた。外はもう暗かったので、大きく古い家ということしかわからなかった。中から若いドイツ人女性が現われ、「夫人は2階です」等と言った。物が無く、薄暗い家の中を進み、「先生が来られました」等と声がする部屋に入った。同時にドアが閉まり、鍵のかかる音が聞こえ、部屋の反対側のドアからも鍵のかかる音

がした。2つのドアは共にしっかりと鍵がかかり、私は閉じ込められた。大慌てで大声で助けを呼んだが、疲れるだけで無駄だった。私は室内を見回した。

第二章

小さく四角い部屋で窓は無かった。天井から明かりが下り下げられ、テーブルと2つ椅子があり、卓上には2本のワイン、2つのグラス、高級葉巻の箱があった。この配慮に驚きつつ、長く留め置かれるのかとも思い、困惑した。また大声を上げたが、答える声は無く、家の中には何かが動く気配も無かった。外からは馬車が走り去る音が聞こえた。私は囚人となり、その間に私の未来の幸福がかかる、大事な時間が過ぎていく。絶望して椅子に座り込んだ。心は Dora のことでいっぱい、自分は彼女を失うように運命づけられているのか等と思った。また、そんなことはない、これは何かの間違いだ、何かの冗談だとも思った。しかし、そうではなかった。再び2つのドアを何度も叩いたが、その音が響くだけだった。本当に1人ぼっちなのか等と考えると、やけを起こしそうになったが、誰かいるかとも思い直し、自分の物品を提供すれば許してくれるのでは等と思った。私はお金等の持ち物をすべて卓上に置いた。これをどう伝えようかと考えていた時、先ほどは気付かなかった呼び鈴があることに気付いた。鳴らそうとした時、後ろから「お金をしまってください、Atwater さん、我々は貴方とおつき合いしたいだけです」等と強い訛りのある、やさしい声が聞こえた。

侵入者の登場とその男が私の名を知っていたことの両方に驚きながらふり返ると、上品で礼儀正しい、笑顔の男がいた。男は深々とお辞儀をした、私は、男がドイツで生まれ、ドイツで教育を受けたことがわかった。男は「貴方とのおつき合い、我々が求めるのはそれだけです」等と言った。驚きつつも私はとてもいらいらし、男が私の時計を返そうとした時、私は後ろへ下

がり「それにしては全く珍しいやり方だ、泥棒1人で仕組めるものではない。君達が欲しいものがお金ならば、金額を決めて私を放してくれ。私の時間は貴重だし、私とのつき合いは不愉快なものになりそうだからな」等と言った。男は笑顔のまま、肩をすくめ「貴方は面白い方だ、お金は要らないと言ったでしょう」等と言い、私に椅子、ワイン、葉巻を勧めた。私は大いに立腹し、悪態をつき、また「こんな所に私を閉じ込めるのはなぜだ。ドアを開けて出してくれ、さもないと - 」等と言った。私がとびかかろうとすると、男は不気味に微笑んで銃を取り出し私に向け、「落ち着いて下さい、Atwaterさん、お互いに楽しみましょう、それがお嫌でしたら - 」等と言い、次の行動を暗示した。私は冷や汗が出るのを感じたが、脅されていると思わせたくなって、「すまんが、銃は置いてくれ。説明する機会を君に与えよう、なぜ私を罠にかけたのか？」等と言った。男が銃を手元に置き「もう話しました」等と言うので、私は冷静さを失いながら「それは不合理だ、君は私を知らない、もし - 」と言いかけた所、男は「失礼ですが、貴方の名前を知っていたではありませんか」等と話した。私は、確かにそうだ、男はどうやって私の名を知ったのだ、私は男もこの家も知らない、私は何かの陰謀の被害者なのか、それとも男が狂っているのか等と考えた。男を見ながら、私は「確かに Atwater だが、それを調べるならば私がお金も権力も持っていないこともわかったはずだ。なぜ私が選ばれたのか教えてくれ」等と言った。男が「貴方とのお話はとても面白いです」等と答えたので、私は我慢できず、怒って男の前に拳を振り上げ、「私を放してくれ! 私には重要な用事がある、今夜を逃すと、永遠に失ってしまうのだ。今夜のことは誰にも話さないから、私を放してくれ」等と声を荒げた。男は「貴方はとてもいい方だ、ワインをどうぞ」等と答え、私は絶望して引き下がり、椅子に座った。男の動機を探ろうと思い、

努めて愛想よく「私とつき合いたい理由が何であれ、1時間以上引き留めることはないだろうね」等と言った。男は不審そうに私を見てから「残念ですが、1時間では上辺すら理解できません。こういう機会は二度と無いので朝まではかかるでしょう」等と言った。男は狂っているに違いない、ただそうだと私をここに連れて来た男やこの部屋に案内した女は狂っていなかった。なぜこの男が私の前にいるのだろうか? 私は絶望し、それでも男に訴えた「今夜は私の人生で特別な夜だ。愛する女性が明日、欧州へ出発するんだ。けんかはしたが、まだ私のことを思っているから、同じ船に乗れば、私たちはうまくいく。」この場で彼女の話を話すのは不安だったが、男の心を動かそうと夢中だった。「何時に出航ですか」と尋ねられたので、9時と答えた所、男は「では8時に解放しましょう。直接、行けば間に合います」等と言った。私はあえいで「しかし準備がまだだ。君には慈悲の心が無いのか?」等と言うと、男は「不幸なことに、8時までドアは開きません。開けられる人がいないのです」等と言った。驚いて「君も同様に閉じ込められて、我々の意思とは無関係に明日までここにいないと言っているのか?」等と言うと、男は「葉巻はいかがですか?」等と言った。私は争っても無駄だと気づき、船上の Dora と彼女の耳にささやきかける恋敵の姿が浮かんだ。私は「持ち物すべて奪われても我慢できるが、未来の幸福が揺らいでいる今、ここで無駄に過ごすなんて悪魔の仕業だ」等と嘆き、頭にある考えが浮かんだ。

第三章

この連中は恋敵と結託しているのでは等と思った。私はテーブルを叩き「君は私を船に乗せまいとしている。あの男は君にお金を払って - 」等と言いかけた。しかし、恋敵が私の計画を知っているはずがない。私は言を取り消し、引き下がった。男が「彼女のことは忘れなさい。私はかわいい女性を1ダースも知ってますよ」

等と言ったので、私は憤慨して答えなかった。男は「女性は悩みの種です。男と楽しみの中に割り込んできます。今も貴方とワインの間にいます」等と続けた。私は絶望して瓶を手にし「そのことは話さないでくれ。飲んでみよう、グラスに毒でも入ってれば、私の死で君たちを罰せられるのに」等と叫んだ。男は首を振り「我々は罰する方で、罰せられる方ではありません。貴方がその床に倒れても、私は何も心配しません」等と言った。男の言葉にショックを受け「罰する方だって？私を罰しているのか？それが私がここにいる理由なのか？」等と言った。男は笑い「なかなか辛辣ですね。でも会話にはそういうスパイスが必要です。スパイスが無ければ話が退屈になりがちですから」等と私にワインのグラスを差し出した。私はそのグラスを叩き落とし、グラスは碎けて、男は困惑したようだった。男は「私を殴ったなら、そのお返しはするのですが、グラスでは - 」等と言いつつ息をつき、悲しげに床の破片を見た。私は悔しさとちょっとした恥ずかしさで、自分のグラスを置き「私を怒らせないでくれ」等と言った。男は少し気落ちしたようだったが、数分後には葉巻を吸い、話し始めた。私は無関心でうわの空だったが、男は気にせず話し続けた。途中、時計を見ると4時だった。私は諦めて、床に倒れ込み眠った。

私の胸に何か触れて目を覚ました。誰かが時計を胸ポケットに戻していた。私はまずそれを取り出し、部屋を見回した。誰もおらず、ドアが開いていた。8時になっていた。私はすぐにその家を出て、港に行った。混雑をかき分け、船まで進み、恋敵と並ぶ彼女を見つけた。彼女の父も近くにいた。私を見て喜ぶ父を押し分け、Dora の所へ行った。「許してくれ。君と一緒に出発するつもりだったが、悪人どもが邪魔をして - 」等と言うと、彼女は「どうでもいい」等と言った。その言葉が冷たいと思ったのか、彼女は赤面し「私は - 」と言いかけた。その時、

ベルが鳴り、見送りの下船を促した。私は一緒に行かなくてはと思ったが、彼女を見てその手を強く握り、その後の言葉が出てこなかった。彼女の言葉を聞く前に、私は下船した。埠頭で彼女の父は驚きと残念の表情で私を見た。彼は「行かなかったのか？君を頼りにしてたんだ」等と言ったが、私は首を振るだけで、何の言い訳も話せなかった。

その後、私は弱っていたのでレストランへ行ったが、何ものどを通らなかった。家に帰ろうと歩いている時、私の遭遇したことを思い起こし、復讐心に火が着いた。何の罪も無い私を監禁した連中は罰せられるべきだ。すぐに警察署へ行った。警官たちは興味深そうに私の訴えを聞いていた。警官から「全員ドイツ人だったか？」等と尋ねられ、「はい」と答えた。彼らは少し話し合い、中の1人が「来るように」等と言った。驚いて理由を聞こうとしたが、彼は私を連れて出た。家に向かう途中、彼は「ショックを受けないように。貴方の昨夜の出来事は確かに不愉快なものだったが、もし帰っていたら、今、その不満を嘆くことができなかつたかも知れない」等と言った。理由を尋ねると、彼は「貴方の同居人は貴方ほど幸運ではなかった。家を見るように」等と言った。まず人垣が見え、その上で我々の部屋の窓が壊れて黒こげになり、一部は吹き飛んでいた。私は「火事！ Richter はタバコを吸っていて - 」等と叫ぶと、彼は「いいえ、その暇は無かった。精巧な機械装置で、昨夜あの部屋は爆破され、貴方の友人は犠牲になった」等と言った。

友人 Richter がなぜ、同郷者の復讐の犠牲になったかはわからない。1年間同居していたが、彼から故郷の話聞いたことはなく、彼が同郷者と共にいるのを見たこともなかった。犯人は突き止められなかったが、家は見つかり、中から機械装置の設計図が発見された。Richter に対して非情だった犯人が私を遠ざけるためにあんなに苦労した理由は、人間性の変った部分

のためであろう。Dora のことが無ければ、私はあの夜のことを感謝して思い出すだろう。しかし、もし犯人が私を解放していれば、よくなかったのかというと、それは疑問だと思ふ時もある。

私は Dora を失ったかって? 今日受け取った手紙を見て、そうではないような気がする。

主人公にとっては、恋愛の危機及びそれを回避するための訪欧の計画、巧妙に仕組まれた拉致、銃を持つ謎の男による監禁そして解放、訪欧計画の放棄と恋人を失う絶望、更には謎の犯人が仕掛けた爆破装置による自宅の破壊と友人の殺害等と、冒険に満ちた時間であり、これらをうまくつなげた面白い物語になっている。説明は無いが、ビルの一部が診療所になっており、2人の住まいも兼ねていたようである。

3

翻訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Dick Atwater	鐵克 高琴而
Dora	娜亞
Richter	列秋
Appleby	歐勃萊
Orange	奥朗

「Atwater」を「高琴而」とするのは、発音からみて合わず、奇妙な翻訳である。

書名について、「A Memorable Night」(忘れられない一夜)を、「傷心之夜」(傷心の夜)としている。原作の意味をより限定した翻訳となっている。

内容については、改訳と省略が多いことが言える。冒頭部分を挙げる。

I am a young physician of limited practice and great ambition. At the time of the

incidents I am about to relate, my office was in a respectable house in Twenty-fourth Street, New York City, and was shared, greatly to my own pleasure and convenience, by a clever young German whose acquaintance I had made in the hospital, and to whom I had become, in the one short year in which we had practised together, most unreasonably attached. I say unreasonably, because it was a liking for which I could not account even to myself, as he was neither especially prepossessing in appearance nor gifted with any too great amiability of character. He was, however, a brilliant theorist and an unquestionably trustworthy practitioner, and for these reasons probably I entertained for him a profound respect, and as I have already said a hearty and spontaneous affection.(122-123頁)

(私は若い外科医で、専門は限られていますが、大きな野心を持っています。これから話す事件があった頃は、私の診療所は、ニューヨーク24番街のまざまずの建物内にあり、若くて優秀なドイツ人と共同で借りていました、それは私にとって、とても楽しく便利なことでした。彼とはある病院で知り合い、一緒に仕事をしていたのはわずか1年ですが、私は彼のことを理由も無く気に入っていました。理由も無く、と述べたのは、自分でさえもなぜ気に入ったのか説明できないからです。彼の外見は特に魅力的でもなく、性格面でもそれほど愛想が いいわけでもありません。しかし、彼は高度な理論家で、疑いなく信頼できる医師でした、そういう理由で、恐らく私は彼を深く尊敬し、先に述べたように心からの好意を抱いたのです。*3)

予紐約一醫士也。年少學淺。懸壺所得。藉

足糊口而已。寓於卡羅非路。同居者爲一德國人。亦業醫。相契甚。然予莫知其所以。然蓋其人貌既不揚。性又甚僻也。數年前予受某醫院聘。居彼處半年。院中有一附設之醫學校。時予友方肄業其中。因相識。彼既畢業。遂爲予聘爲助手。彼於醫學之理論。及臨症之手段。與予蓋相若。凡日間。吾兩人方在室各理事。或出外診治。及夜則相聚一室中。或縱談。或作葉子戲。或煖閣圍爐。或綠罍把酒。嘔嘯謳歌。推襟送抱。相得蔑以復加焉。(1頁,句点は原文のまま,以下同)

(私はニューヨークの医者です。若くて学問も浅いため、開業はできましたが、食べるのがやっとです。カロー非路に住み、ドイツ人と同居しています。彼も医者です。とても仲が良いのですが、その理由が私にもわかりません。彼は容貌がすばらしいわけではなく、性格もとても偏っています。数年前、私はある病院に招かれ、そこに半年いました。院内には医学校があり、友人がちょうどそこで学んでおり、そういうことから知り合ったのです。彼は卒業し、私の招きに応じて助手になりました。彼の医学の理論や診療の腕前は私と同レベルです。我々2人はずっと同じ部屋で仕事をしており、往診する時もあります。夜には一緒にいて、雑談したり、トランプしたり、ストーブの周りで暖を取ったり、酒を飲んで談笑したり歌を歌ったりしており、気の置けない仲で、相性がとても合っていました。)

翻訳は、“カロー非路”が出て来たり、同居のドイツ人が私の助手になったり等と自由に改訳している。

細かい改訳を数か所述べる。まず、主人公が Dora の家からニューヨークに戻って来た場面である。

It was therefore with no laggard step I hurried to my office, nor was it with any ordinary feelings of impatience that I found Richter out; for this was not his usual hour for absenting himself and I had much to tell him and many advices to give. (126頁)

(それ故、ぐずぐずせずに、私は自分の診療所へと急いだ、Richter を探し当てるとこの焦りの気持ちは無かった；なぜなら彼が不在になるいつもの時間帯ではなく、私には彼に話すこと、報告することがたくさんあったからである。)

既至寓所。即入書室中覓列秋。不見。僮云：“渠已出門二小時。”予甚訝之。蓋彼未嘗於日暮出行也。(2頁,コロンの引用符は補った)

(家に着き、書齋に進み、列秋を探したが見当たらなかった。使用人は「あの方が外出されて2時間になります」と言った。私はとても怪訝に感じた。彼が日暮れに外出することは今まで無かったからである。)

原作にはいない使用人が登場してしゃべっている。続いて、Warner 夫人の使いを確認する場面である。

“I am a servant in the house where she was taken ill.” (127頁)

(「私は夫人が発症した屋敷の使用人です。」)

其人曰：“我爲納瓶斯博士之僕。瑪尼夫人現在我主人家。”(3頁)

(その男は「私は納瓶斯博士の使用人で、瑪尼夫人は今、私の主人宅におられます。」)

原作にはいない“納瓶斯博士”の名前が現れて

いる。続いて、部屋に監禁された主人公と男との会話の場面である。

I thought he bestowed upon me a look of quiet pity, but if so he soon hid it with his uplifted glass.

“Forget the girl,” said he; “I know of a dozen just as pretty.”

I was too indignant to answer.

“Women are the bane of life,” he now sententiously exclaimed. “They are ever intruding themselves between a man and his comfort, as for instance just now between yourself and this good wine.”

I caught up the bottle in sheer desperation. (145頁)

(私は男が憐れみの表情を浮かべたように思った、しかしそうかも知れないが、男はすぐに持ち上げたグラスで表情を隠した。

「その女性はお忘れなさい」彼は言った、「私はかわいいだけの女性を1ダースは知っています。」

私は憤慨しすぎてそれに答えられなかった。

「女性は人生における悩みの種です」彼は今度は簡潔に主張した。「女性はいつも男性とその楽しみの中に割り込んできます。例えばちょうど今のように、貴方とこのすばらしいワインとの間にです。」

私は絶望のあまりその瓶をつかんだ。)

其人如不聞予言。取酒瓶更斟一盞。奉我曰：“先生毋念彼女。天下多美婦人。即不幸此次夫敗。大丈夫又何患無妻。高琴而君。頃所見之敵國兩女郎。與意中人孰美...耶。...且...且...(彼笑不成聲)婦人爲幸福之螫賊。君苟不爲妖魔所惑。何至有美酒而不飲。”(8頁)

(男は私の話を聞いていないかのように、酒瓶を取りグラスに注ぎ、私に差し出して

「貴方は彼女のことをお考えなさるな。世間にたくさん美しい女性がいます。今回は不幸にも失敗しましたが、男たるもの、妻がいなくらいで何を気に病むことがあります。高琴而さん、先ほど会った我が国の2人の女性と貴方の恋人はどちらが美しい!.....ですか。...それに...それに...(男は笑って声にならなかった)女性は幸福の邪魔者です。貴方がもし悪魔に惑わされていないければ、美酒を手にして飲まないなんてことがあるでしょうか。)」

非常に自由に改訳している。上記3か所すべて改訳が成功しているとは思えず、やはり改訳の理由がわからない。物語最後の場面を挙げる。

“A fire!” I shrieked. “Poor Richter was smoking”

“No, he was not smoking. He had no time for a smoke. An infernal machine burst in that room last night and your friend was its wretched victim.”

I never knew why my friend's life was made a sacrifice to the revenge of his fellow-countrymen. Though we had been intimate in the year we had been together, he had never talked to me of his country and I had never seen him in company with one of his own nation. But that he was the victim of some political revenge was apparent, for though it proved impossible to find the man who had detained me, the house was found and ransacked, and amongst other secret things was discovered the model of the machine which had been introduced into our room, and which had proved so fatal to the man it was addressed to. Why men who were so relentless in their purposes towards him should have taken such pains to keep me

from sharing his fate, is one of those anomalies in human nature which now and then awake our astonishment. If I had not lost Dora through my detention at their hands I should look back upon that evening with sensations of thankfulness. As it is, I sometimes question if it would not have been better if they had let me take my chances.

* * * * *

Have I lost Dora? From a letter I received to-day I begin to think not.(152-153頁)

(「火事だ!」私は叫んだ。「かわいそうに、Richter はタバコでも吸っていて - 」

「いいえ、彼は吸っていなかった。吸う暇もなかった。無慈悲な装置が昨夜、あの部屋で爆発し、貴方の友人は哀れな犠牲になったんだ。」

彼がなぜ同胞の復讐の犠牲になったのかは全くわからない。我々は同居していた1年間、親しかつたけれども、彼は自分の国の話を一切しなかつたし、私は彼が同国人と一緒にいるのを見たことはなかつた。しかし、彼が何らかの政治がらみの復讐の犠牲になったことは明らかだった、というのも、私を監禁した男を見つけるのは不可能だったが、その家は見つかり、搜索の結果、他の公にできない物品の中から、我々の部屋に持ち込まれた機械の設計図が発見されたからである、その機械は配達された人間の命を奪うものだったとわかつたのである。彼という目標のためには全く容赦の無い人たちが、なぜ私を遠ざけて彼と運命を共にしないようにしてくれたのかは、時々、我々も驚くような人間性の不規則の一つであろう。もし私が、彼らに監禁されたせいで Dora を失っていなければ、感謝の気持ちであの夜のことを思い出したであろう。ただ、もし彼らが私を放してくれていたな

らば、よくなかつたのかというと、それは疑問だと思ふ時もある。

* * * * *

私は Dora を失ったかって? 今日受け取った手紙からそうではないと思ひ始めている。))

復呼曰：“焚乎。 - 必列秋吸煙……”曰：“否。否。書包中炸彈爆發。列秋死矣。此蓋全屬政治的關係也。”

當予自奧朗返寓時。不嘗見棹上有一黃色布包乎。設無人促我出。則予且爲殭桃矣。後予復往實根得路古屋中數次。但見柴窟彫剝。階闌磨蝕。庭草淒迷。更無一人。

此爲數月前事。現予獨寓斐爾斯路。相與把臂言歡日夕過從者不復有人矣。鄰笛寥亮。華屋全非。指點舊墟。車過腹痛。所堪告慰諸君者。娜亞已返。春明未夢。秋扇遽捐。諸君知歐勃萊爲何如人乎。(10頁)

(そこで叫んだ「火事だ。 - きっと列秋はタバコでも吸っていて……」「いやいや、鞆の中の爆弾が爆発したのだ。列秋は亡くなった。これはどうやらすべて政治的な關係に原因があるようだ。」

私が奥朗から帰宅した時、卓上に黄色い鞆を見かけなかつたか? もし誰も私を連れ出していなければ、私は代わりに死んでいたのだ。後に、私は数回、實根得路のあの古い家に行ったが、ただ建物はボロボロで、入り口には小動物が走りまわり、庭も寂しい様子で誰一人いなかった。

これは数か月前の出来事で、今、私は1人で斐爾斯路に住んでいる。親しく歓談し、一日中つき合う者はもういない。近隣の音が寂しく響き、家に華やかさは全く無い。以前の家を指して亡き友を悼んでいる。読者の皆様を安心させることという、娜亞が戻って来たことだ。關係がうまくいかないうちに、捨てられたそう。皆様、歐勃

葉がどんな男だかわかりでしょう。)

最後までやはり原作通りに翻訳した方がいいと思う。

4

訳者・劉延陵は後に、白話で書かれる、古来の形式にとらわれない新詩の創作や翻訳等では有名になるのだが、本訳は文言であり、関連は感じられない。また、本訳のような甚だしい改訳ぶりを見ると、後の詩の翻訳も正確なものなのか心配になってくる。

中国の新詩の歴史を語る際には必ず言及される訳者の、文筆業に携わった初期の、原作名・原作者、更には翻訳であることすら書かれていない作品の素性を明らかにしただけでも本稿の価値はあると思う。 罫

【注】

- 1) 波多野健「編者解説」(『霧の中の館-論創海外ミステリ113』(A・K・グリーン著,波多野健編訳,梶本ルミ訳,論創社,2014.1.25)収)227頁に拠る。初出発表形態は記していない。余談であるが、同227頁は、Anna Katharine Green の作品『X.Y.Z.』を「WYZ」に誤り、『7 to 12』を「7 to 9」に誤る(229頁も)。
- 2) インターネット「Google books」ホームページで公開されているテキストを使用した。
- 3) 日本語訳は、「忘れぬ一夜」(訳者不記、『新青年』12-3(博文館,1931.2.20)掲載)を参照した。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- 陳玉堂編著 中国近現代人物名号大辞典 (浙江古籍, 1993.5)
- 周葱秀<劉延陵>, 中国文学大辞典 第四卷(馬良春、李福田総主編,天津人民,1991.10)
- Nancy Dzedzic, Jennifer Garipey, Scot Peacock 編 『Twentieth-Century Literary Criticism』Volume63, Gale Research, 1996年
- Marie T. Farr 「Anna Katharine Green」, 『American Women Prose Writers, 1870-1920(Dictionary of

Literary Biography Volume221)』(Sharon M.Harris 編, The Gale Group, 2000年)

Scot Peacock 編 『Contemporary Authors』volume159, Gale Research, 1998年

Barbara Ryan 「Anna Katharine Green」, 『Nineteenth-Century American Fiction Writers(Dictionary of Literary Biography Volume202)』(Kent PLjungquist 編, Gale Research, 1999年)

波多野健「編者解説」, 『霧の中の館-論創海外ミステリ113』(A・K・グリーン著,波多野健編訳,梶本ルミ訳,論創社,2014.1.25)

樽本照雄「漢訳ドイル「荒磯」物語 - 山縣五十雄、周作人、劉延陵らの訳業」, 『清末翻訳小説論集』(樽本照雄著,清末小説研究会,2007.5.1)収 初出は『大阪経大論集』52-2(通262,2001.7.15)

William G.Contento and Phil Stephensen-Payne 編 「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2015.1.9確認)

N・M卿管理「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2015.1.9確認)

「Google books」 <http://books.google.co.jp/> (2015.1.9確認)

次号の公開は2015年7月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

《深谷美人》罕見林譯與
《空谷佳人》譯者考辨

古 二 德

林紓(1852-1924)以引進西方文學為中國文壇所賞識，例如，《黑奴籲天錄》獲得近代詩人陳去病(1874-1933)的讚許；再者，福州三一學校師生亦愛閱讀林譯作品。¹晚近林譯研究頗增，可是未鑑定出的林譯作品尚共有57種。²本文詳細論述《深谷美人》罕見林譯的下落、內容及其社會相關性，同時也討論《深谷美人》與《空谷佳人》兩譯的關係、譯文風格和譯者身份。不巧，已盡全力試圖鑑定出兩譯的原著卻依然無果，但筆者仍希望本文能有利於未來的研究。

《深谷美人》事由

民國3年8月1日(1914年)林紓、陳器全譯的《深谷美人》由北京琉璃廠宣元閣出版。陳器(1880-1955)，字獻丁，福建閩侯人，除此譯作

外，亦與林紓亦合譯《癡郎幻影》，由商務印書館出版(1918年10月)，英國賴其鐘女士著(英名不詳，筆者猜測原著為 Marie Connor Leighton)。留存至今的林陳書信共有九通，載於李家驥編《林紓詩文選》(頁381-384)，雖然未註明年期，不過從內容可見編者是按時間順序排列林陳九通。林紓信中提及一部英文小說，希望陳器有暇時翻譯，但是因為兩人時間不吻合，林紓提議陳器先自譯，後給予林紓譯抄來刪改：

所譯書恐晚來有酬應之事，不如移作日間三四點鐘中多譯千餘字，趕一禮拜中譯完，即不玩，一禮拜後，明日起以夜補之，後此吾弟可自譯抄好交來，愚為改刪王慶通，[...]以弟之筆墨，經愚一改，必可成。萬萬勿疑。

其九通無年期，不過因林陳合譯西洋小說只有二本，由此可以推斷出該信寫於1913年第一季度(根據《深谷美人》敘，民國2年5月7日林紓已閱完陳譯)或1918年上半年(《癡郎幻影》出版於10月份)。因為林陳書信有序記載了小說翻譯過程，並通過其他相關書信內容可推知是否林紓所提的“書”為《深谷美人》。

先閱其三四通開頭：

祥兒已赴青島，此行果克勵志，如老弟之期望。

千秋日林璐以學生職分送壽禮於其師，奈何屏之，怪甚。

林璐(1899-?)，字叔遇，為林紓三子，信中通常稱為“祥兒”，1912年“就近送入天津德華學堂，為青島之預備”³。從其三通來看，陳器當初期望林璐平安遠赴青島求學，所以該信必

¹ 陳去病(筆名醒獅)，〈題黑奴籲天錄後〉，《新民叢報》31期，1903年3月20日，頁106；劉玉蒼，〈早期的福州三一學校〉，載《文史資料選編(第五冊)》，福建人民出版社，福州，2003年，頁433。

² 包含未定書名二種，原著者為哈葛德(Henry Rider Haggard)及老商倭尼(Georges Ohnet)。請參馬泰來，〈林紓翻譯作品全目〉，收入錢鍾書，《林紓的翻譯》，商務印書館，北京，1981年，頁97、102。

³ 李家驥編，《林紓詩文選》，商務印書館，北京，1993年，頁321。

寫於林璐剛到青島特學高等專門學堂的時候。林璐何時入學？

林紓寫給林璐的信件共存30通，先收入李家驥編《林紓詩文選》，並不按日期排序；⁴後由林璐三子林大文發表了其祖父的學生林仲易所保留的四通。根據其中的第一通（陰曆8月12日）得知，林璐已赴青島學習的時候“家有三弟二妹”：林琮（1904年出生）、林璈（1908年）、林珣（1912年）為子，林璿（1901年）、林瑚（1911年）為女。因為第三妹生於1914年，該信必寫於陰曆1913年8月12日（陽曆9月12日），林璐已14歲。

綜上所述，林紓所提的“書”必譯於1912年末與1913年初之間。該年期正好吻合林陳同譯的《深谷美人》。詳究林紓給予陳器的信件，可以重現《深谷美人》的翻譯過程：

其二：

本擬親往前門小購西洋器物數事，而姬又在月里，不能出門。

陽鬱（1874-?），字道鬱，蘇州人，林紓的第二任夫人，養下五子四女。1912年生了林珣，1914年生了林瑩，該信可能寫於1912年下半年。

其四：

請托令岳送去英文小說一部，祈一過目。訂星期二晚間到舍開譯，王生蓮（訂正：秀）中譯法文，訂單月（訂正：日），吾弟以雙日惠臨可也。

黃濬（1891-1937），字秋岳，福建閩侯人，為林紓弟子，根據該信，《深谷美人》由黃秋岳向陳器寄送，先讓陳器瞧一瞧，後到林紓畫室⁵

開始翻譯。王慶通（生卒年月不詳），字秀中，福建閩侯人，與林紓同譯法國小說。林王始於1913年合作，1914年1月1日即出版〈情鐵〉，先刊於《中華小說界》第1卷第1期，1914年9月由中華書局再出版。該信所提的“中譯法文”即〈情鐵〉。

其五：

譯書不必拘以星期，但吾弟有暇時即通知或造府或到舍間都可。

其六：

本日尚有筆墨之事及三處飯局，尊囑譯事請以下星期為始。

其七：

自開正以來，匪日非忙，今略暇矣。訂本月十四夜，吾弟挾書到舍同譯。

即此時林紓非常繁忙，難訂與陳器同譯小說之日。1913年上半年林紓翻譯了64部短篇歷史作品，刊於《庸言》和《平報》，同時由《平報》亦正在出版林紓、力樹護同譯的〈情窩〉。因每日均有新鮮譯稿投於《平報》，林紓“匪日非忙”。

其八：

茲有高生翀溪（訂正：滄）者，介紹一印刷局來買小說，頗得高介，吾弟能否早起到舍，趕譯千餘字，夜來再譯足成五萬字，貴錢亦大佳事。

高翀（1863-1920），字瑩玉，蘇州人，晚清換籍上海，任天津《時報》、上海《申報》編輯等。高翀向林紓介紹新印刷局，翻譯費頗高，從而林紓敦促陳器早到畫室繼續譯英文小說，共有五萬字左右。由此可見，該信內容有力地證實了上述論證：《深谷美人》共有五萬四千字左右，由北京宣元閣出版，然而《癡郎幻影》不僅共有七

⁴舉例來說，其四通中的林璐已經17歲，不過其廿五還是15歲。

⁵林紓譯完《深谷美人》小說的“舍”為“春覺齋”畫室。請參《深谷美人》敘之簽名。

萬字左右，而且由林紓常合作的商務印書館出版。新印刷局為北京宣元閣，可等同於北京琉璃廠宣元閣，創立於1911年左右，⁶出版過至少六本書，1919年停業。

重看第九通可見該時《深谷美人》翻譯未完。因而林紓提議陳器自譯草稿，此後讓他刪改，正如王慶通所譯的法國小說。換言之，林紓與王慶通所譯的小說非口譯，而且《深谷美人》全書未必均為口譯，有可能一部分由林紓改正而已。

一經確認林陳書信提到《深谷美人》之後，新問題即出現，因為根據譯敘，許多學者認為林紓於二十五日之內能夠翻譯五萬四千字：

余以二十五日之功譯成，都五萬四千餘言。⁷

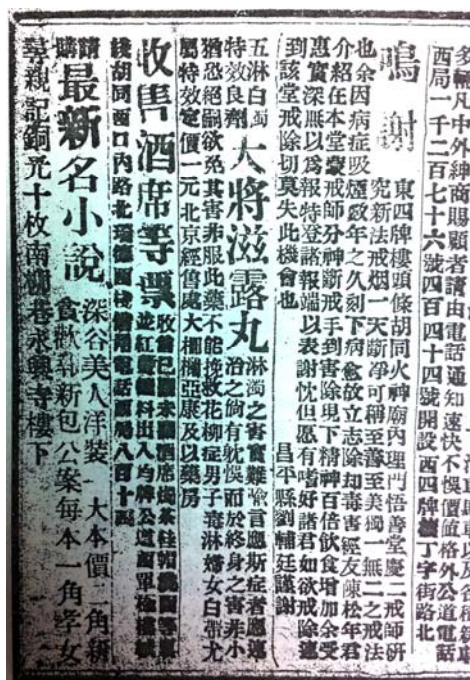
不過，由上述書信研究可見，之所以林紓花費二十五日翻譯該書，是因為林陳時間不吻合，無法相遇。總之，《深谷美人》敘所記載的時間並不能套用於其他的譯作上。此外，因為林紓所記的“二十五日”寫於五月七日，亦可推斷林陳書信第四至九通和《深谷美人》翻譯均寫於二三月份。

《深谷美人》下落及其社會相關性

該譯未得到廣泛研究的原因之一為其下落不明。據 WorldCat 數據庫所記的書目情報，該譯現存放於中國國家圖書館，國圖卻無藏。經過調查後，國圖古籍館教員程天舒向筆者解釋，幾年前國圖索引導入外部數據庫，後來刪除了無藏的題錄。WorldCat 數據庫同時引用國圖數據庫，未修正。迄今筆者已確定兩冊：一冊藏於大連圖書

館魯迅路分館，索書號為743.5/4391，不過“政府不允許查看民國書，被封存起來”，⁸因此未見。二冊藏於中國人民大學圖書館古籍特藏庫，索書號為7 10.34-721/6，缺少頁169（末尾）。此外，阿英（1900-1977）所編的林紓序言包括《深谷美人》敘。阿英熱衷於搜集書籍，有可能當時獲得一冊。不巧，文革期間阿英所藏的書籍被查封，至今倖存不多，藏於蕪湖圖書館阿英藏書陳列室，筆者未見。⁹

雖然1914年版為所知的唯一版本，不過於1919年9月1日至9日之間《愛國白話報》曾發佈“購銷最新名小說深谷美人洋裝”廣告。此通非林陳姓名，但其中的“孝女尋親記”與林譯內容吻合（插圖一）。該書能買於北京南柳巷永興寺樓下（今稱為南柳巷45號永興庵）。是否屬新版或再版不詳。



插圖一：《愛國白話報》刊影（第2158號，1919年9月6日，頁8）

⁶雖然琉璃廠宣元閣始於1913年初版，但是自1911年至1918年齊家本（1886-?）任琉璃廠宣元閣印刷局的職員。參齊家本的《經理股東經理表》，1951年（<http://lf76.cn/?p=2217>，2014年11月）。

⁷參《深谷美人》敘，收入阿英所編《晚清文學叢鈔：小說戲曲研究卷》，中華書局，北京，1960年，頁269。

⁸大連圖書館魯迅路分館負責人與筆者的私人通話，2014年10月25日。

⁹參惠艷，《阿英的藏書與目錄思想考略》，《黑龍江史志》234期，2010年7月，頁108。

林陳所譯《深谷美人》令同輩嘆為觀止。出版林譯僅幾日之後，惲毓鼎（1862-1917）的兒子惲寶惠（1885-1979）購此書，其父於日記中記如下：

一日看畢。用意深厚，譯筆雅飭，序文揭著書者之意，專為維持家庭孝友勤儉而作。吾中國家族主義，注重家教，嚴守女誡，實為泰西所不及，乃西人羨而欲效之，吾之維新家反立意欲破壞之。真萬死不足蔽辜也。¹⁰

林譯小說目的不止限於引介西方文學或西學，更重要的是拯救亡國，開啟民智，改良社會。林紓認為西學中的道德觀根於基督教的道德體系，與中國倫理學並非對抗：

且和忒士庫為信教之人。生平篤信上帝十誡中第五條之警告。遂盡其力量。致孝其親（《深谷美人》頁8）。

林紓在《深谷美人》敘中亦提出中國社會問題，提倡女權和家庭改良：

中華之纏足，歷二三千年，父母誤不仁之心以為仁，女子忍辛楚，苦束縛，如在黑獄之中，一旦睽睨天光，心朗神舒，可以匪所不為。纏足者大屈之時，一轉而為剪髮，則父母丈夫之所不能禁，即以此為大伸之日，進而不已，將有更甚於此者，未可知也。

之所以林紓認為女權“必有大伸”，即因自古女界有大屈，不過“雖婚姻出於自由，而在在伸以禮防，未嘗有軼出範圍以外者”。女權非興旺不可，可是“倡女權，必講女學”，¹¹如果未學而求改革，投訴無果：

女子參政之說，仍日昌於歐西，至羣雌結

社，喧騰政府之門，跳跟塵肆之上，商旅噪逐，警衛指斥，僇辱至矣，而仍弗悛。[...]其中皆名人救世之言，余稍為渲染，求合於中國之可行者。

《深谷美人》曾有短暫成功，不過宣元閣出版社不及商務印書館有影響力，所以出版若干年後，該書漸漸變成一部罕見的林譯。

《深谷美人》內容

《深谷美人》原著者為英國倭爾吞，英名不明，非伊迪絲·華頓（Edith Wharton）或威爾通夫人（Amy Walton）。從內在證據而言，原著英文小說寫於1883年至1912年之間（請參如下）。經全力試圖鑑定出原著依然無果，所以如下簡介小說內容以享其他研究者：

《深谷美人》講述克爾·和忒士庫和馬佐里兩“美人”的愛情故事。孝子和忒士庫收到病弱養父的一封信，他毫不遲疑地返回家鄉。一到家，病得嚴重的養父向和忒士庫講出敗業傾家之事：投入的資金均於金礦中，最近發生危險而沒有時間出售商業夥伴的股票，終於破產。他本來想傳給和忒士庫的寶貴遺產不僅消失不見，還取而代之承擔巨額債務。其中一個債主為道格拉夫人的已故丈夫，他臨終時委託和忒士庫老人資助其妻。他事業破產進而錢不存，故囑咐兒子親自通知道格拉夫人。除此之外，和忒士庫老人也告訴兒子遺囑中有一封密函，內容極為重要，不能讓別人知道。不過遺囑中的密函為空白，和忒士庫先認為父親用藥水寫信，後發現密函放錯地方。暫且，和忒士庫上火車探望道格拉夫人，居於克斯末格鎮烏魯倭爾鄉，近於貓鈴山的深谷。道格拉夫人女兒為三：賴爾拉大姊，寡母，病得不輕；徽里士小妹，十九歲未婚，身為瘦弱；馬佐里，孝友未婚，為和忒士庫所深愛。隨著故事的發展，和忒士庫找到生父，解決債務問題，最終成為富人。小說以深谷中兩美人的婚姻結尾。

¹⁰史曉風編，《惲毓鼎澄齋日記》，浙江古籍出版社，杭州，2004，第二冊，頁700。

¹¹哈葛德著，林紓、魏易口譯，《紅礁畫漿錄》，商務印書館，上海，1906年，〈序〉，頁2。



插圖二：《深谷美人》封面

林陳所譯的外語名字包括主角、地名、機構等。因為原著不詳，如下的對照表只能提供暫定的原名：

華語翻譯	暫定原名
和忒士庫	Hitchcock
馬佐里	Marjorie
阿爾勿忒夫人	Miss Alwood
伯明翰	Birmingham
右司墩	Euston
柯波烏勒鄉街	Corporation Street
克斯未格	Keswick
烏魯倭爾惕	Braithwaite
貓鈴	Catbells
肯白勒大學	Keble College
牛津麥帝冷大學	Magdalen College

《深谷美人》第一章如下開頭：

伯明翰新車站中 [...] 車來自右司墩。至伯明翰。此為第一次息也。路不止一百十二英里（頁1）。

伯明翰火車站建於1833年，為倫敦和伯明翰鐵路線的終點站，全長112英里，1846年為倫敦和西北部鐵道的鏈路站。右司墩原名為 Euston 首站。此外，和忒士庫在肯白勒大學肄業（頁38）。肯白勒大學原名為牛津的 Keble College，立於1870年。末後，和忒士庫參觀伯明翰火車站附近的柯波烏勒鄉街（頁1），原名為 Corporation Street，1883年建於以前的 Lichfield Street 上。由此得出結論，《深谷美人》原著寫於1883年與1912年之間。

《深谷美人》第一章

伯明翰新車站中。長日忙碌如人海。方火車集時。忙乃不翅。履聲輪聲。奔竄雜沓。竟不可以筆墨形容之。中有二官道。自倫敦通至西者。及通至內地者。均由此出。若在大商富賈。居是鄉者。舉足即可四達。若為鄉曲之人。一至此繁夥之區。耳目則為之昏瞶矣。站中有六平台。售

深谷美人
英國倭爾吞原著
閩縣林 紆筆述
同縣陳 器口譯

第一章
伯明翰新車站中。長日忙碌如人海。方火車集時。忙乃不翅。履聲輪聲。奔竄雜沓。竟不可以筆墨形容之。中有二官道。自倫敦通至西者。及通至內地者。均由此出。若在大商富賈。居是鄉者。舉足即可四達。若為鄉曲之人。一至此繁夥之區。耳目則為之昏瞶矣。站中有六平台。售票之房亦夥。而飛橋之上。行之續續而過。有同梭織。有一日在百忙中。倫敦車至。聲隆隆然如海怪飛空。喘息噫氣。幻作煙雲者。車來自右司墩。至伯明翰。此為第一次息也。路不止一百十二英里。

深谷美人

插圖三：《深谷美人》第一章

票之房亦夥。而飛橋之上。行之續續而過。有同梭織。有一日在百忙中。倫敦車至。聲隆隆然如海怪飛空。喘息噫氣。幻作煙雲者。車來自右司墩。至伯明翰。此爲第一次息也。路不止一百十二英里。而行車則僅二句鐘也。方其至時。有無數之腳力。聚而待之。迨及速度少緩。面羣力之眼光。爭注頭等車上。以本日所得之錢。悉在是間耳。車中有大餐房。坐客已滿。尚有大夥之客。他適。遂不下車。獨有一紳士。手一提包。行至車門。且下。羣腳爭集是人之側。求卸其行裝。得小利。似此腳力。苟嗅得錢腥。必不即釋其人。大類阿刺伯種人也。此紳士在萃中。檢取一人。授以提包。餘人咸悵然而散。此腳力問紳士安。適紳士曰。吾往內地第一站趁車處。在何處平台也。腳力曰。數至第五者是矣。蓬車中有無先生行裝。紳士曰。無之。此車以五點三十分啟行。吾須此可一句鐘。腳力曰。否。先生表緩。往日快車咸應期至。然今日已遲至五分鐘矣。紳士取表與站中巨表對後。隨此腳力跨登飛橋。至第五平台後。以資遣此腳力。此腳力今日所得。較諸希望中。乃增可二倍。數分鐘後。此少年之紳士。往來蹀躞於平台之上。似有煩憂。即不能耐。而雜亂之聲。復足亂其腦筋。車之一往一來。及挑夫之奔走。腳力之呼嘯連貨。童子揚聲賣報。萬聲雜動。合以行人趨走騰踴。此紳士煩懣已極。顧亦不自知其所以然。即非來自田間。蓋眼閱此紛華久矣。往日所見。都似無覺。獨此一日。似片晷之間。亦不能堪。即決計去此車站入城間行。俟車至時再趁。遂以提包置行李車中。遂上高梯。越人叢而過。隨諸人流水之勢。不期至於廣街之上。方其行時。衆皆屬目。所以屬目者。大有可怪之狀。人既高碩。氣概凜然如軍人。似其執業。一望已知。然亦不關其武概。蓋桓桓中。却含一種秀麗之容。髮即黑添。目亦蔚藍。鈎鼻而薄唇。儼然露其貴胄風裁。一望令人動目。方其行近柯波烏勒鄉街時。人恒指目其後。稱爲偉人。時街中玻璃窓中。燈光燦然。爲十二月四點以後。天已洞黑。街中人聲囂噉。以時近耶穌生日矣。士女無數爭購備物事。爲耶穌誕辰之用。亦有無事

之人。目注玻璃窓中。稱美其繁夥。雖此地人多。面紳士尚不覺厭。且空氣較車站爲良。賣花之人。爭集官道之側。紳士自女郎擔中。市得紫羅蘭花。見此賣花女郎。瑟縮作畏寒狀。紳士初菲必購此花。以爲女郎顏色所勾。不能不市。且授價多至三倍。即轉入穹門之市。電光燦射異常。各肆所列之貨。皆足撩人購取。爲耶穌誕辰之用。穹門之右多珠寶肆。珠光瑩然照眼。中加小電光。與珠光相映發。能使珠寶在白書中尤足媚人。紳士過時。中有一肆。門亦適啓。有少女盛服襲銀鼠之裘。盈盈自門中出。少女見此紳士。即引手爲禮。作嬌婉之聲呼曰。和忒士庫在此耶。和忒士庫曰紫姑安往。爲吾夢想所不及料。乃克於此相見。且紫姑在伯明翰安事。紫姑曰。吾居低爾考西中。去此六英里。其來爲擲擋耶穌生日應需之物。不期乃與君相見。且與君同住烏里白拉時一見。後此音問渺然。今胡不與阿母言。阿母方在此中。爲毛智代購條脫。吾母允毛智必以耶穌生日日賜以此物。故同其至此。令自檢購。毛智累檢不當意。吾見對門肆中有條脫爛然。當往觀之。今何妨姑入爲我定其去取。和忒士庫遂入。見一婦人。一少女。方俯視珠飾之金條脫。巨珠簇入釧上。光華射目。紫姑語母曰。母試思吾在店門外。所見者誰耶。母試觀之。婦人聞聲迴顧。言曰此非和忒士庫耶。吾甚幸今日見汝。與汝別數月矣。今安居。和忒士庫曰。鄙人方居挨阿竝歇忒中。今茲且與彼間別。然吾曾以書與郎君愛白玲。竟無書見答。母曰。此子惰極不欲書。實亦不能書。今先生在伯明翰何事。和忒士庫且視表。且言曰。阿爾勿忒夫人。吾道行經此耳。表至五點三十分。即行。夫人曰。然則道中逢君爲生平至幸。幸勿匆匆。可留此爲耶穌誕之聖會。先生能否屈尊。此時愛白玲亦當寧家。紫姑曰。必留。能留則大衆之歡。如烏里白拉時也。且尤望先生惠顧。觀我在烏里白拉所映之景物。彼間景物殊醉人。和忒士庫曰願之。但恐不能酬。夫人曰。果不能至耶。胡不撥冗一行。和忒士庫曰。似決不能。茲老父方病。今奔視之。至于父病何狀。吾尚未之知。昨日得老父書。子裏行間。尚奕奕

有神。今日忽得電報。趣我速歸。果老父必需我。我安能不赴。夫人曰。親病安可辭。然老身之意。視以為非病。或且以他故。欲面先生。果非病。或以電。或以書。書固能詳。電中但作一來字。我即悉之矣。和忒士庫曰。謝夫人視我。我寧敢忘德。今當歸車站矣。夫人曰。汝果行耶。能否更赴佛勒栖爾飲茶乎。何妨更待一二分鐘也。和忒士庫曰。一行即失此車。不及待矣。遂與諸人執別。匆匆行出街心。紫姑更檢他釧。實則妙日實隨此少年行也。和忒士庫行至平台時。自念曰。此輩安知吾不能與之平等。在理宜一告之也。

附錄：《空谷佳人》譯者考辨

《空谷佳人》先刊於商務印書館的《東方雜誌》第3年第8至13期（1906年9月13日至1907年2月7日），原著譯者不記，1907年3月由商務印書館出版，1914年4月再版，譯者為商務印書館編譯所，名不記。《空谷佳人》非林譯，此事學者已知。雖然《空谷佳人》每版非林紓姓名，不過不少學者認為該譯出自林紓，最新事列為張旭所編《林紓年譜長編（1852-1924）》（福建教育出版社，福州，2014年9月，頁124）。筆者認為錯誤認定的原因可能與《深谷美人》有關，由於兩譯作品的標題有相似之處，意思相同，可能被誤解地出自林紓。因此，筆者簡略地討論《空谷佳人》譯者身份。

先按年期順序排列刊於《東方雜誌》的小說翻譯如下：

第一年

（美）毒美人，譯者不記
郵賊，譯者不記

第二年

（英）雙指印，譯者不記
（英）天方夜譚，奚若譯

第三年

（日）俠黑奴，吳禱譯
（日）美人煙草，吳禱譯

（英）空谷佳人，譯者不記
第四年

（俄）憂患餘生，吳禱譯
（美）陶人案，甘永龍譯
（美）數縷髮，甘永龍譯
（美）黑幻像，甘永龍譯
（美）車中語，甘永龍譯
（美）拯三厄，甘永龍譯

《東方雜誌》第五年共有六部翻譯，三部譯者不記，三部為林紓、曾宗鞏同譯的《荒唐言》。由此列表可見，年期與譯者有一定相關性。第一二年初譯者不記，第二年末有奚若（1880-1914）譯者，第三四年初翻譯有吳禱，錢塘人（即杭州），身份不明。第四年初再有吳禱一部，甘永龍（亦甘作霖，平湖人，身份不明）五部。由此相關性可假定《空谷佳人》譯者或許為《東方雜誌》所述譯者之一。通過譯者文筆比較法淺析，可助於證實此理論。先看《東方雜誌》中的《空谷佳人》開頭：

倫敦有卜乃德者。翩翩裘屐少年也。生具冒險性質。剛毅不屈。奮發有為。而頗摯於用情。倜儻自喜。少孤。怙恃相繼失。而其曾祖父與其祖父。顧老壽。均尚健在。第以賤而行惡。不齒於人。卜夙慕某富翁女。渴欲乞婚。而女父顧薄其貧。意弗之屬。卜亦未敢輕啟齒也。

《空谷佳人》文筆不僅不及林譯的活潑，而且其寫作風格古老艱澀，文本中句末常有過多語氣助詞，譯書時還有名字縮寫的習慣，例如卜乃德縮為卜。此外，譯者省略對話中的人物名字，以致“曰”取代西方文學中的引文線，且經典圈點亦換成頓號（句中的每字右側伴隨圈點，但非用於句首）：

始問女曰。卿得毋為覓手套來歟。曰。然。曰。僕之於卿（頁1-2）。

《東方雜誌》第一年中兩種翻譯作品的風格與其有天淵之別，清晰易讀，《毒美人》近於林譯文筆，〈郵賊〉用白話文而寫。第二年初的《雙指印》風格渾似《空谷佳人》，多於句末語氣助詞，名字為縮寫（路山縮為路，惠康為惠，查爾士為查），不過其譯者不記。其次有奚若所譯的《天方夜譚》，1903年10月20日始刊於商務印書館的《繡像小說》第11期，休刊於第55期（日期不詳），¹²續刊於《東方雜誌》第2年第6至12期，文筆優美敏捷，其古風格卻不近於《空谷佳人》。第三四年初有吳禱譯者，均用白話文而寫，不吻合。最終有甘永龍所譯的五部短篇小說，渾如《雙指印》及《空谷佳人》的古老風格，而且亦多於句末語氣助詞。相似地，譯者縮寫人物名字，例如〈陶人案〉中的范爾德縮為范，〈數縷髮〉中的藍斯克、古納、高立魯縮為藍、古、高等。由此可推論出《空谷佳人》譯者並非林紓，而是由甘永龍翻譯。

仍有兩種主題：首先，《空谷佳人》博蘭克巴勒原著者身份不詳。儘管《清末民初小說目錄》第6版的建議極佳，“博蘭克巴勒”為“BLANK VALLEY”的音譯，意思為“空谷”，可是不曾有該書名的記錄。該段期間，甘永龍譯於《東方雜誌》的著者有培福台蘭拿（Burford Delannoy）和加撒林克羅女士（Anna Katharine Green）；筆者閱覽二者作家的全集，非《空谷佳人》。

其次，自明治45年（1912年）5月14日至8月14日由《盛京時報》再版《空谷佳人》，刊於第1651至1693號，頁1（第1669號後刊於頁3），插圖精美，共有43期，不分章，用白話文而寫（插圖四五）。《盛京時報》的《空谷佳人》非原著新譯，但依於《東方雜誌》的文言文翻譯。其譯開頭如下：



插圖四：《盛京時報》刊影



插圖五：《盛京時報》刊影

話說英國倫敦京城裡。有一人名喚卜乃德。生的相貌不俗。性情豪爽。胆量極大。無論甚麼事他全敢辦。心思極其剛勇。而且還是。於歸人女子身子最多情。年紀二十多歲。父母是早已全死了。家中就剩下他的祖父。和他的老祖兒。雖然是上了年紀了。可是身子還狼結實。因年輕的時候兒。品行不端。不做那個正經的事情。所以人全都看不起。不和他們一同來往。

甘永龍所譯的《空谷佳人》，結尾有調寄攤破浣溪沙（詞牌），白話文省略而增加如此：“空谷佳人的這本書。可也就算是完了”。

¹²該刊第55期不記日期。請參王文君，〈就《申報》刊《繡像小說》廣告〉，《清末小說から》114期，2004年7月1日，頁33-37；樽本照雄，〈王文君氏へ『繡像小說』発行遅延問題について〉，《清末小說から》114期，頁37-43。

《中国通俗小说总目提要》补遗八则

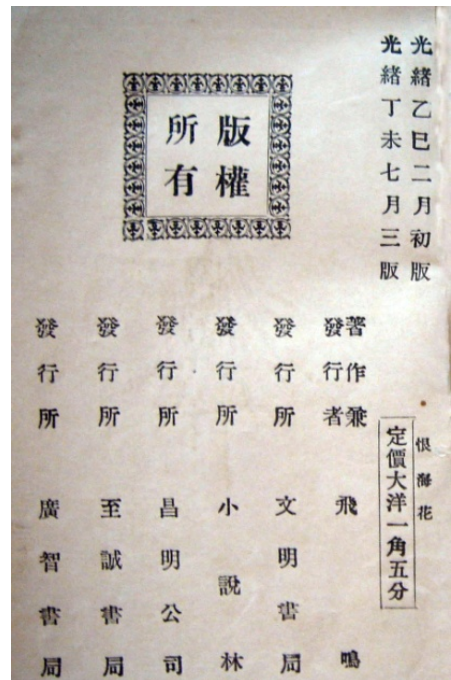
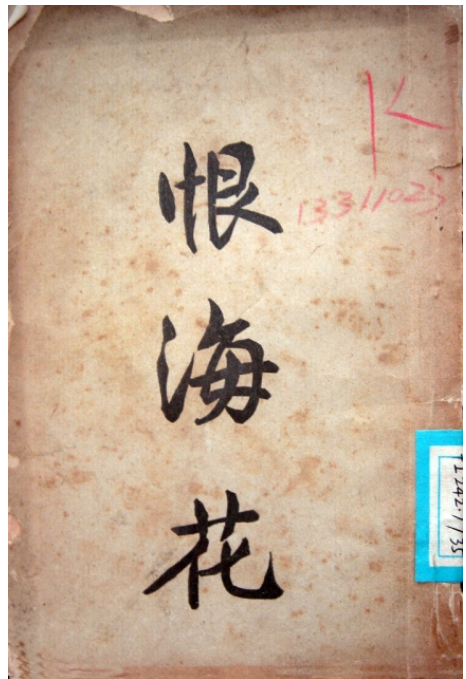
付 建 舟

内容提要 作为集体智慧的结晶，《中国通俗小说总目提要》是一部重要的中国通俗小说工具书，收录甚多。该书初版于1990年，由于当时条件的局限，一些作品被遗漏了，欲使完璧，须应补遗。笔者根据多年的积累，补遗八则。

关键词 中国通俗小说总目提要 补遗 八则

《中国通俗小说总目提要》（以下简称《总目提要》）是一部大型的且十分重要的中国通俗小说工具书，由全国十八个省市一百多名专家通力合作，历时三年得以告竣。该《总目提要》网罗甚广，收录作品甚多，可谓全备矣。然而，由于它出版于1990年，受当时条件的局限，一些作品标明“未见”，一些作品更未提及。笔者长期关注清末民初小说版本，发现一些小说作品未被《总目提要》收录，觉得有补充的必要，根据所见，补遗八则。《总目提要》的“体例”是“一书一题”，每题由书名、作者、版本、内容提要 and 回目五个部分组成，《补遗八则》大致依其体例，略加变动，收录小说序跋以取代“内容提要”。现依笔者所知作品最早问世时间为序，予以叙录。

一、恨海花



《恨海花》，版权页署“著作兼发行者 飞鸣”，发行所有文明书局、小说林、昌明公司、至诚书局、广智书局。光緒乙巳（1905）二月初版，光緒丁未（1907）七月三版。一册，36页，定价大洋一角五分。《总目提要》未提及。【南京图书馆藏】

卷首作者有一段话类似小引，兹录如下：

飞曰：当聚铁叙述其意中人事之际，余闻之悲感。然方冀其好合於将来也，乃未几而警电传来，聚铁东下矣，又未几而玉葬香埋矣。推其致此之因，皆不得自由之咎也。读钟秦临终束我之书，辄唏嘘扼腕，而悲我国民之束缚困苦也。不然，以聚铁、锤秦之才貌之智慧，合力以营国事，其成就岂可量哉，而今一以死一以颓矣。余写二人事，忽喜忽悲，忽愀忽惧，而恨而算酸，不知读其事者以为如何？

聚铁天资机警，阅历颇深，惟无魄力，不敢有拔俗之举动尔。

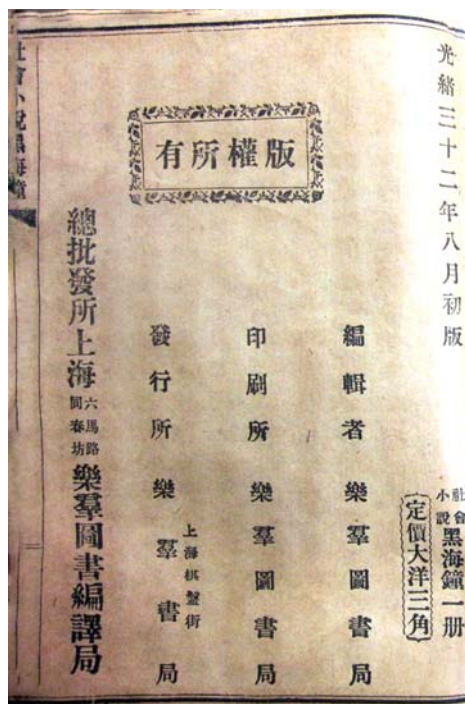
锤秦余未见，不知其人如何？然于前后各简之辞气观之，固贞静多情、爱国好学之奇女子也。

二、黑海钟（初编）

《黑海钟》（初编），内封题“社会小说”，署“松陵田铸撰”、“上海乐群图书编译局印行”。版权页署“编辑者 乐群图书局”、“印刷所 乐群图书局”、“发行所 乐群书局（上海棋盘街）”、“总批发所上海六马路同春坊乐群图书编译局”。光绪三十二年（1906）八月初版。一册，定价大洋三角。石印，线装。《总目提要》未提及。【浙江图书馆藏】

全书十八回，有回目，依次为：

- 第一回 少年虎
- 第二回 狭斜游
- 第三回 蜜骗
- 第四回 新妇谏夫
- 第五回 误结匪徒
- 第六回 被诬系狱
- 第七回 美人计
- 第八回 良史折狱
- 第九回 毒药治病
- 第十回 回禄
- 第十一回 贸易失利
- 第十二回 赠银
- 第十三回 活鬼



- 第十四回 引贼入门
- 第十五回 匿名赠珠
- 第十六回 疯狂
- 第十七回 舟中遇美

第十八回 嗜吸鴉片人結局

目录前有《绪言》，兹录如下：

天生毒物以貽害我同胞者，百年于兹矣。嘉道间，不过盛行于闽粤，今则二十二行省遍地皆有此物耶，非所谓鸦片烟耶？其命名也，初不知何所取义，此中暗无天日，茫无崖岸，殆黑海欤。我中国人醉生梦死耽耽焉，沉溺于是者，上自公卿，下至士庶，盖不可以数计矣。既为绝大之漏卮，又是第一弱种弱国之原因。今者戒烟社各处立矣，熬膏厂行将开矣。风声所播，气习所转，凡失足于前而回头于后者，不可胜计，似无须一介寒士浪费笔墨，再作晨钟之警梦。岂知当兹时局，其悔悟者仅有十分之一二，而怙终者尚有十之八九，苟不乘此一隙之明使之触目惊心，出苦海而登彼岸，非爱国爱种之人。鄙人之作是书，本此意也。然明知一杯之水难救舆薪之火，但愿得少数人阅是书而能悔悟焉，则著者之天职尽，而社会亦稍受其幸福已。至推除毒种，起百年之沉痾而立苏之，岂余之责也夫。

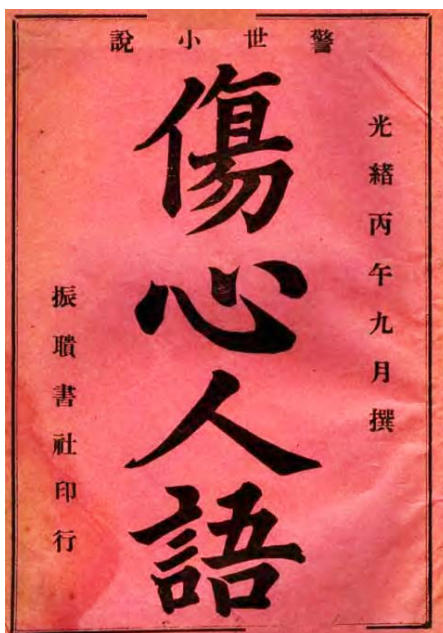
三、伤心人语

《伤心人语》，封面与扉页相同，均题“警世小说伤心人语”、“光緒丙午九月撰”、“振聵书社印行”等字样。正文首署“湘西梦芸生著”、“南海鍊山氏评”、“善甫校字”。版权页署“著述者 湘西梦芸生”，“批评者 粤南鍊山氏”，“发行者 警世书会”，“寄售处 新民丛报支店（上海四马路） 上海各大书坊”。丙午年（1906）菊月（农历九月）初版发行。一册，86页，每部定价大洋三角半。《总目提要》未提及。

【复旦大学图书馆藏】

凡八章，有章目，依次为：

- 第一章 救国莫先於救心
- 第二章 京华冷观
- 第三章 督抚之误国
- 第四章 新智识与旧道德之冲突
- 第五章 南京徵兵与巡勇之交哄



- 第六章 瀛海归来谭
- 第七章 东京支那学生之现象记
- 第八章 革命平议谈

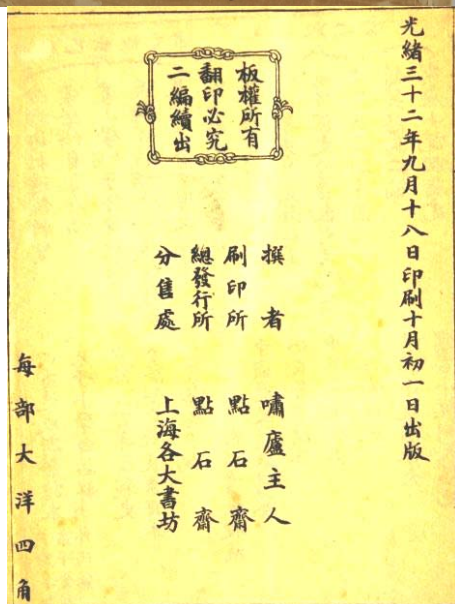
卷首有三吴蛰公于丙午（1906）秋七月在上海撰写的“叙言”，其文为：

有一物焉，而可於形色声势之中变人意志、铸人灵魂者，小说是也。虽然，此道亦岂易言哉，

同是稗官小史，善用之则为琼浆，不善用之则为鸩毒，亦在人慎择之而已矣。自时势变迁，风潮不静，人既知小说势力之潜大，而又可以博社会之欢，於是逐末者流，闻风飚起，说部满街，竟可汗牛，虽其中披沙拣金，名著亦往往而有。然黄口腐儿，枯肠生皱，辄执笔而与施曹争席，毋乃太不自谅乎？夫爱国之情出於天性，黄氏之种族未必即异於天骄。特以 垢千叠，我相遂泯，而又无人为之洗锈而发莹，遂致偵侯如盲豕，鹿鹿至今。故佛门之一棒之喝，亦小说家之不二伎俩也。独是立说之道，庄论虽不如谐语，而一指芸云，借题抒写，既未中其要害。狃狃者，每以此为梦影空花，授己以解脱之地，故册中有影，反复作壁上优游，亦词幻使之然也。至一书之出现，总以有影响於人群而为价值。若仅利用旧时儿女风月之习惯，吾知白紵词佳，反於人间多增一层孽障，而况乎杂欧槩而入亚墨，风物悬异，俗尚亦殊，昧於采询，而肆情妄造，白色名媛，未尝不可以牵合於亚州神女。然一言之不慎，即为世道伦理之隐忧，不亦大可惧乎？且书足启慧，慧启而害与俱来。西人谓偵探书多，亦非国家之福，吾国人性最长於摩仿，使一经传染，其患将不可胜言。凡此皆不为社会设想之过，利令智昏，群思逐臭，遂不借以整集，鼠经而为蝇头狗苟之计，使始皇不再生，则中原之祸恐无已时。此吾所以仰望明星，而憎兹嚼火也。吾友梦芸生，五溪之杰也，平生不肯以文字示人，而其抱负则足以震荡群儿，吞吐黄白。近为吾人所敦促，以两周间而演为此册，痛扫时俗理论，而以人心为针砭，说部中之麟角空青也。抱此玄珠，足以醒我尘梦，使此书有影响，则天时人事，其有转机乎？嗟乎！孤峰突起，望云物而兴悲，一鸟鸣空，唤群生以速起。世之读者，如仍以寻常说部目之，斯则非著者之本意也。是为序。（注： 表示原字不清）

四、立宪后之新国民

《立宪后之新国民》，封面有两面旗帜，一



面上题“立宪后之新国民”，一面绘有“龙”图案。版权页署“撰者 嘯庐主人”，“印刷所 点石斋”，“总发行所 点石斋”，“分售处 上海各大书坊”。光绪三十二年（1906）九月十八日印刷，十月初一日出版，每部大洋四角。《总目提要》未提及。【浙江图书馆藏】

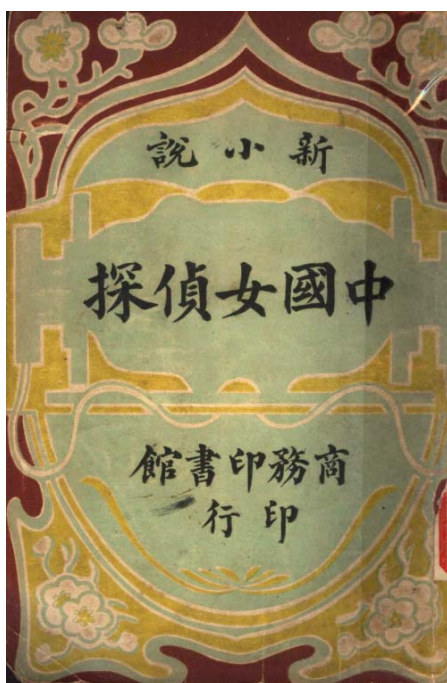
目录首与正文首题“立宪后之新国民初编”，版权页题“二编续出”，由此可知故事未完。

初编凡十回，有回目，依次为：

- 第一回 电掣风驰宣布立宪 霞苍露白溯洄伊人
 第二回 梦境迷离帷灯匣子剑 议论警辟东爪西鳞
 第三回 刻画描摹群魔毕现 铺张扬厉中国开光
 第四回 父老欢呼同伸嵩祝 志士慷慨演说纶音
 第五回 众口交推家庭教育 现身说法自治规模
 第六回 侃侃而谈按时立论 头头是道成竹在胸
 第七回 舌剑唇枪无往不利 风清月白即景生情
 第八回 冷笑热嘲片言启衅 东挪西凑八面张罗
 第九回 巨款纷投众擎易举 虚怀若谷群望所归
 第十回 亦庄亦谐如闻香口 有经有纬煞费苦心

卷首有自称“海上新国民一分子”者在蛰庵于光绪纪元三十有二年（1906）中秋日撰写的《立宪后之新国民初编绪言》，其文为：

是书着眼在个人自治，个人自治即《大学》之诚意正心，《中庸》之慎独。吾中国虽三尺童亦能知之，能言之。苟其身体力行，固无人不富于自治之能力者也。乃自实学不讲，竞趋于末，舍修齐治平循序渐进之阶级，荒而不治，而唯撙拾外人之唾馀，一则曰西学，再则曰西法。今且立宪，立宪之声盈天地。呜呼！噫嘻！数典忘祖，吾上下俯仰间，吾盖不自知其歉歉欲绝矣。第业已适逢其会，值此专制过渡至立宪时代，不就题发挥，仅仅与辨立宪之预备，在此不在彼，人未有不目为迂缓，甚且笑与题背者。故是书只就人情物理若有意若无意，每至议论酣畅时略一点睛，人已晓然。於其命意之所在，而於立宪预备之先着及其魔障，则尤不敢不斟酌而出之，而一以按时立论为断。彼良心果犹未尽渐灭，吾可决其有触斯通，随感而应也。而其唯一之宗旨，大抵不外力求自治以治人，自治以治地方，推而行之，扩充之，将见施之一乡一邑而有余者，即措之中国。二十二行省之广，四百兆人民之多，亦始不足也。书成因更抒其心，所欲言如此，狂澜汨汨，酣睡沉沉，然人之欲善，谁不如我？意者凉血骤热，灰心复然，相与惩前毖后投袂而起乎？



光緒三十三年七月初版

翻印必究

分售處	總發行所	印刷所	發行者	著者
漢口 武昌 漢陽 漢川 漢南 漢北 漢東 漢西 漢南 漢北 漢東 漢西	上海 棋盤街中市	上海 北河南路北首 伍談橋四	商務印書館	陽湖呂俠

(每本定價大洋壹角) (中國女偵探)

五、中国女侦探

《中国女侦探》，封面题“新小说”，商务印书馆印行。版权页署光绪三十三年（1907）七月初版。著者阳湖吕侠，发行者商务印书馆，总发行所商务印书馆（上海棋盘街中市），分售处各地商务印书分馆，印刷者商务印书馆（上海北

河南路北首横浜桥西)。全书123页，每本定价大洋叁角。《总目提要》未提及。【上海图书馆藏】

内收血帕、白玉环、枯井石三篇。无序跋。

作者吕侠是著名史学家吕思勉早期的笔名。

《中国女侦探》有一广告，内容为：是书共分三大案，合成一册。中叙一毗陵女子及女友数人俱习武事，而尤研究西国侦探之术。上二案彼所口述，下一案即彼数女子所破。其情事之奥奇，钩距之精深，及种种手段之灵妙，变化百出，诚为侦探界生色也。每册三角。

六、鸦片案

《鸦片案》，傲骨著，小说林社光绪三十四年（1908）二月初版，同年同月发行。封面题“中国侦探案第二册”。印刷者为小说林社活版部，发行为小说林社总发行所，苏州珠明寺前宏林书局、常熟海虞图书馆，分售者为各省书局。一册，44页，定价洋一角五分。《总目提要》未提及。【上海图书馆藏】

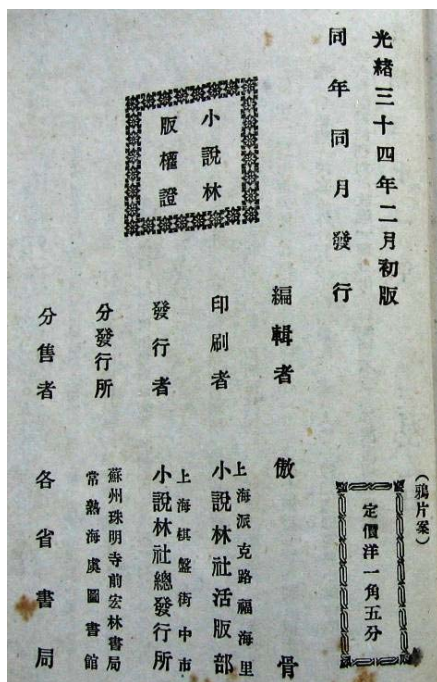
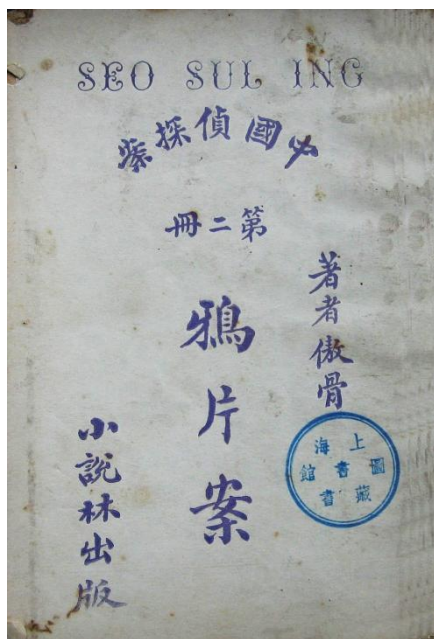
凡八节，依次为案由、初探、谒楚、剖尸、再探、舟谈、捕犯、追述。

卷首有著者“弁言”，兹录如下：

鸦片之足以死吾国，五尺童子，仅能言之。近禁烟之令颁，四海苍生，咸欣欣有喜色相告，谓从此可以除妖雾，强种裕民。乃官吏视为具文，奉行不力。一二热心志士，从事调查，辄遭社会所痛垢，若书中过亢者，且丧其生命矣。呜呼！荒愤累累骷髅，到处是鸦片烟鬼，败屋嗷嗷乞丐，将来尽黑籍冤魂，中烟毒而死者，不知几千万人矣。今烟运已终，过亢何辜？犹遭波及，烟之害人，可胜言哉！吾愿读吾书者，因是知禁烟之弊，改良办法，得收好效果焉。若徒以侦探案视之，则非著者之本心矣。

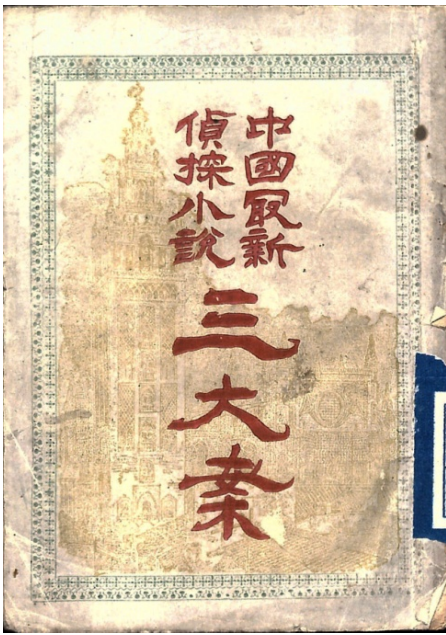
七、三大案

《三大案》，封面题“中国最新侦探小说”，



版权页署“著作者 哀民”，“校阅者 通智社”，“印刷者 通智社”，“发行者 通智社”，“贩卖者 各大书局”。光绪三十四年（1908）十月出版。定价大洋三角。《总目提要》未提及。【南京图书馆藏】

《三大案》是指《烟霞窟》、《风竹林》与《轩亭恨》。《烟霞窟》凡30页，《风竹林》凡



綺怀曰：幸哉！君之获出此穴也，妾意郎君必陷身於此烟室中，然不谓若辈有如此秘密之窟室也，使非前日妾至某茶室啜茗，则郎君之命休矣，妾安能与君重圆破镜哉？此事始末，颇足引为终身之戒。若辈之凶暴，残虐吾侪实无力与之角，今亦未如之何？第记述其事以为世鉴可矣。爰叙其颠末，而使天问子记之，胥纪实也。其地与姓氏，则姑隐假之云尔。

《三大案》之《风竹林》中的一则如下：

前路平平叙来，入后始叙出小林侦探之妙处，格局变化，看似平庸实新奇。

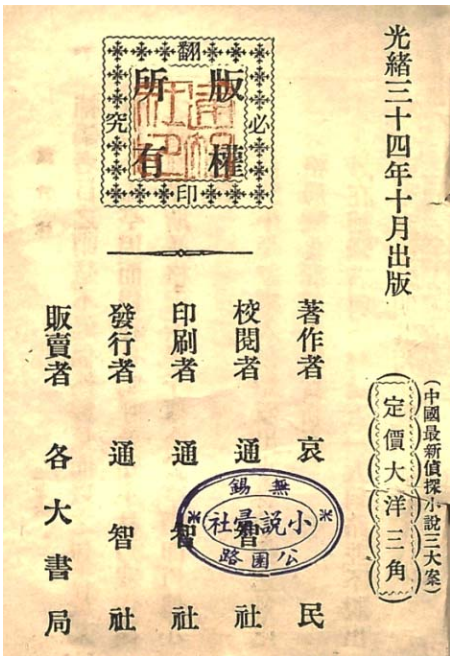
妙在补锅者与小林是否一人，前路并不说出，直至未始点明，其用笔使人不测。

八、碎琴楼

《碎琴楼》有多种版本，据日本学者樽本照雄先生所编《清末民初小说目录》（第6版）（日本清末小说研究会2014年）记载，庚戌七月既望（1910年8月19日），《碎琴楼》由上海环球书局印行、大新书局总发行。宣统三年二月二十五日（1911年3月25日）至1912年6月1日，兴业何谏的《碎琴楼》在上海《东方杂志》8卷第1—12号连载。1913年4月，《碎琴楼》由上海商务印书馆出版单行本，1918年9月四版，1925年5月六版，1930年6月八版，1933年10月国难后一版，1939第二版第五次印刷。《总目提要》未提及。

《碎琴楼》，封面题“小本小说”，正文题“言情小说”，兴业何谏编纂。中华民国二年（1913）四月初版，中华民国十四年（1925）五月六版。发行者商务印书馆，印刷者商务印书馆（上海北河南路北首宝山路），总发行所商务印书馆（上海棋盘街中市），分售处全国各地商务印书分馆。全书分上中下卷，共三十四章。上中卷，十九章，合一册，150页。下卷十一章，一册，144页。每部定价大洋叁角伍分（外埠酌加运费汇费）。笔者所见就是该版本。【复旦大学图书馆藏】

卷首有兴业何谏于庚戌（1910）七月在京师



20页，《轩亭恨》凡26页，合计76页。《烟霞窟》纪禁烟事，于禁烟事中别开生面，可资鉴成。《风竹林》纪余孟亭事，报纸未及载，足以为广场冒功者戒。《轩亭恨》纪秋瑾轶事，事迹离奇足以补他书未载。

书中有一些评点，摘录两则，《三大案》之《烟霞窟》中的一则如下：



中華民國二年五月六日初版

(小本) 碎琴樓 (二册)
(每部定價大洋五角五分)
(外埠酌加運費)

分售處	總發行所	印刷所	發行者	編纂者
福州 漢口 廣州 汕頭 廈門 香港 上海 北京 天津 漢口 南京 蘇州 杭州 寧波 溫州 紹興 嘉興 湖州 常州 無錫 鎮江 揚州 南通 蕪湖 安慶 九江 長沙 衡陽 常德 重慶 成都 貴陽 昆明 蘭州 西寧 太原 保定 石家莊 濟南 青島 煙台 濰縣 鄭州 開封 西安 蘭州 西寧 太原 保定 石家莊 濟南 青島 煙台 濰縣 鄭州 開封 西安	上海	上海	上海	上海
商務印書館	商務印書館	商務印書館	商務印書館	商務印書館

代机，脱令泯之，毋乃自汨？然则余友嘉言，只兰影菊香，无关实际。岁庚戌，同客京师，壮貽辄过余，朗朗持前论弗已。余挈囊所疑者质之，壮貽瞠目曰：“嗟呼！君以为是种种者，固佳物耶？吾家母鸡，孵雏十数，泽而毛者十之七，赤而瘠者三也。天寒夜冷，母鸡翼之，群儿争集其腹。赤而瘠者，以弱弗竞争，雪立其侧。母鸡睨之，无如何。不周日，三赤瘠者俱毙。嗟呼！君以为是种种者，固佳物耶？”语竟，拊髀而笑，声震于梁。突探胸出一束授余，扬长竟去。是即余书所自出也。余少而钝，弗能为哲学家言，如余友云云，姑且勿论，第束中所陈哀艳若是，又乌可弗传。爰检而笔之，以自娱旅寂。稿成，秉烛迟余友，顾余友久弗至。时则斜月衔窗，槐阴布影，天空夜冷，微闻云际哀鸿与户外车声相答也。

四

广西三馆之东舍撰写的自序，其文为：

余友壮貽恒语余，谓苟欲平治天下者，必令天下人无情，此殆非苛论也。壮貽固谓，苟能无情，斯泯色相，色相泯则伦类齐矣。盖余友壮貽者，实流荡于老佛之篱，以自写其郁勃不平之气。顾余犹窃窃疑之，谓进退消长者，盖道德理法之

(作者：付建舟，浙江师范大学人文学院研究员)

早期漢訳ドーデ「最後の授業」6

最初の漢訳虞霊「戦後」のばあい

神田 一三

ドーデ ALPHONSE DAUDET 「最後の授業 LA DERNIÈRE CLASSE」 (“CONTES DU LUNDI” 1873) の漢訳といえば、まず胡適訳「最後一課」があげられる。それほどによく知られている。また、胡適が最初に漢訳したとも考えられていた。今まで検討してきたとおりだ。

2013年、鬮文文によって新しい指摘がなされた。ドーデ「最後の授業」を最初に漢訳したのは、虞霊だという。訳名は「戦後」、「時報」(1910)に連載された。詳細は後述する。

とりあえず、どれくらいの新発見かを説明しよう。

諸説が消滅する

文による発見は、従来からいわれてきた最初の漢訳に関する諸説のすべてを否定する。誰も言及したことがない。

ドーデ「最後の授業」は、中国ではどのように翻訳されてきたのだろうか。わかっている早期漢訳を、胡適漢訳をふくめて発表順にならべてみよう。それぞれの説明は、あとで行なう。

- 1 (法) 都徳著 胡適訳「割地」『大共和日報』1912.11初旬 / 「(短篇小説) 割地」『留美学生季報』2巻1期 1915.3 / 改題して

「最後一課 (La Dernière Classe)」^{ママ} 『短篇小説』第一集 上海・亜東図書館1919.10 初版

- 2 (法) 文学大家都徳著 匪石訳「(教育小説) 最後一課」『湖南教育雑誌』2年1期 1913.1.31
- 3 (黄) 静英女士訳「(普法戦争軼事) 最後之授課」『礼拝六』42期 1915.3.20
- 4 江白痕「(愛国小説) 小子志之」『中華小説界』2年5期 1915.5.1

いずれも中華民国以後に発表されている。

これら以外の作品は、注に掲げる*52。

短篇小説だとはいえ、同じ作品がこれだけ多くの人々によって漢訳された事実に驚きもする。それぞれについて説明しよう。

1 胡適漢訳は、英訳からの転訳だ。削除が多い。しかしながら、発表年月を見れば、どれよりも先行する。最初の漢訳だと考えられてきた理由だ。

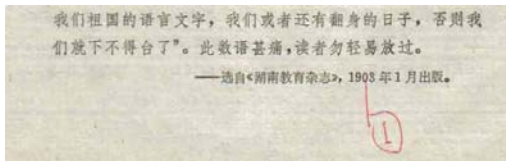
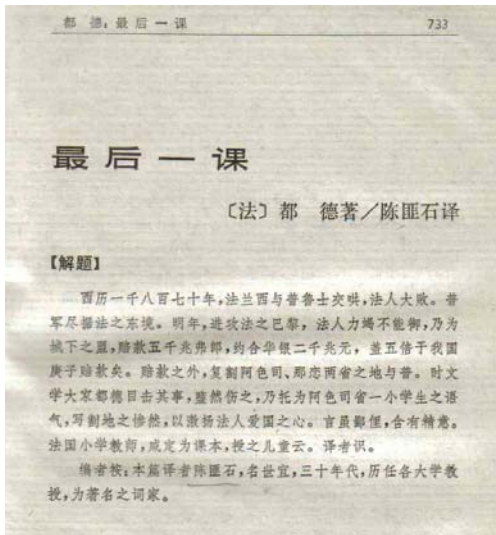
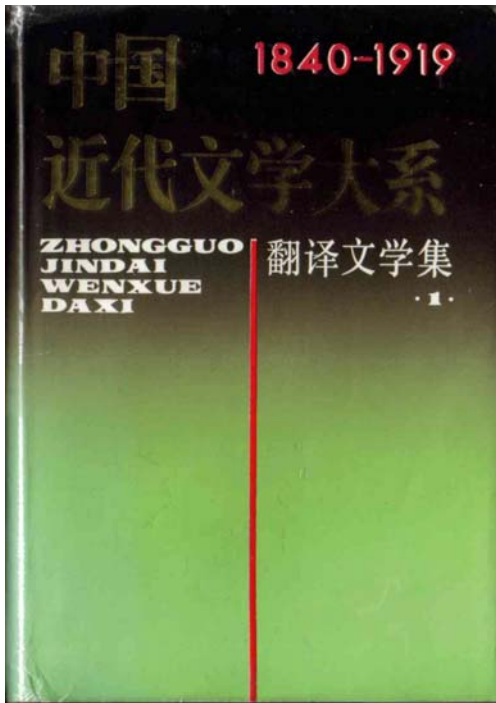
そう指摘する中国の代表的な著作は、韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』(北京・中国社会科学出版社2008.6)だといってもいいだろう。韓一宇は、それまでの研究を総合して胡適漢訳以前にドーデ「最後の授業」が漢訳されていることをいわない。ということは、胡適漢訳が最初だと考えた。

2 匪石漢訳については、韓一宇の論文がある*53。すでに紹介した。韓一宇の指摘は、まとめると以下の通り。

ひとつは、匪石が独自に翻訳したものではない。胡適の漢訳にもとづいて書き換えただけ。普通の意味で翻訳とは異なる。

つぎに、該作品は作品集(施蛰存編11集26巻 翻訳文学集一 上海書店1990.10)に収録されたとき編者によって誤った解説をつけられた。

すなわち、掲載誌は1913年の刊行であるにもかかわらず、1903年と誤った(737頁)。また、根拠もないのに匪石を陳姓にしてしまった(733



頁)。

前者の、初出『湖南教育雑誌』を「1903年」の出版だと誤記した件についてのべる。

それ以前に正しい記述をしている目録はあった。樽目録は初版(1988)から1913年と記述し

ている。樽目録第2版(1997)、第3版(2002)では「1903年に配列するのは誤り」と注記した。誰も気がつかなかったらしい。

『中国近代文学大系』が誤った結果はどうなったか。胡適漢訳の1912年よりもずっとさかのぼるように見える。中国最初の漢訳は、匪石によってなされた。そういう誤解が発生した。以後、誤記の引用がくりかえされる。

私の知っているだけで以下のものがある。理解を助けるため記号をつける。正しい、×誤り、一部が正しい。この3種類だ。韓一宇の説明と重複する論文もあるがご了解いただきたい。

樽目録初版1988は正しい。

×施塾存編『中国近代文学大系』11集26巻翻訳文学集—1990が誤りのはじまり。

陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』上海教育出版社1994.12

59頁。陳匪石訳。1903年に配列するのは誤り。265頁1913年に再度掲載し、こちらは正しい。

樽目録第2版1997は正しい。

×蘇華「胡適と都德的《最後一課》」『文藝理論と批評』1998年第2期 1998.3.24

128頁。陳匪石訳、1903年と誤る。しかも、匪石漢訳が胡適漢訳と同文であることをいわない。

×馬祖毅『中国翻訳史』上巻 漢口・湖北教育出版社1999.9

729頁。陳匪石訳、『湖南教育』雑誌1903年と誤る。

×王繼權「略論近代的翻譯小説」王宏志編『翻譯与創作 中国近代翻譯小説論』北京大学出版社2000.3

51頁。「陳匪石訳的《最後一課》(1903)」と誤る。

樽目録第3版2002は正しい。

韓一宇論文2002が正しく指摘した

張 偉「《最後一課》漢訳溯源」『塵封の珍書異刊』天津・百花文藝出版社2004.1 / 2004.7第二次印刷

1913年掲載というのは、いい。ただし、陳匪石訳とし、日本語訳から転訳した可能性があることと奇妙なことをいう(146頁)。さらに、江白痕「(愛国小説)小子志之」が最初の全訳だと書いている(148頁)。結果として誤り。郭延礼「都徳《最後一課》的首訳、偽訳及其全訳文本」『中華読書報』2008.4.16 電字版
韓一字論文を引用するのだからその部分は正しい。黄静英「最後之授課」が最初の全訳だと説明して誤る。

趙亜宏「從胡適の早期翻譯小説看其文学翻譯觀 以《柏林之困》与《最後一課》為例」『名作欣賞』2011年第29期 2011.10.1

匪石漢訳には言及がない。胡適は直訳を重視し、間接翻譯あるいは意識には賛成しなかった(131頁)。「最後一課」には細かな一部の削除があるが、直訳で原著に忠実である手法を採用した(同上)、と事実ではないことを書く。

×張曉編著『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』北京大学出版社2012.9

2642(304頁)。角書不記、陳匪石訳、雑誌期数不記、1903(光緒二十九)、1冊などと誤る。

×李 默「周瘦鵬《欧美名家短篇小説叢刊》：“近來記事之光”」錢理群主編『中国現代文学編年史 以文学廣告為中心(1915-1927)』北京大学出版社2013.5

68頁。「1903年1月刊載在《湖南教育雜誌》上、陳匪石所訳的都徳的短篇小説《最後一課》」と誤る。

上の×印を見れば、施蛰存編『中国近代文学大系』11集26巻翻譯文学集一の誤りがどれだけ後の研究に影響をおよぼしているのか理解でき

る。また、中国の研究者は、正しく指摘した樽目録、韓一字論文を読まなかった。

3 黄静英漢訳は、英訳からの転訳だ。郭延礼は、フランス語原文から直接漢訳したと誤解している。また、胡適漢訳に削除が多いのに比較して、全訳では最初だといった。しかし、実際に訳文を見れば、原作とは無関係に書き換えている箇所が複数ある。忠実な漢訳ではない。

4 江白痕漢訳も、英訳から転訳したもの。于潤琦主編『清末民初小説書系・愛国巻』(北京・中国文聯出版公司1997.7.20)に収録された。ただし、再録にあたり本文にいくつかの誤植が発生している。

上記のとおり張偉は最初の全訳とする(147頁)。胡從経『晚清兒童文学鈎沈』(上海・少年儿童出版社1982.4.81頁)は、「フランスの著名な作家ドーデの愛国的激情をふくんだ短篇「最後の授業」から翻譯した(訳自法国著名作家都徳的飽孕愛国激情的短篇「最後一課」)」と説明した。まるでフランス語原文にもとづいた漢訳のようにではないか。誤り。

もういちど文書の指摘を示せば、虞靈訳「戦後」で『時報』(1910)に連載された。

清朝末期にさかのぼるのだ。あきらかに胡適漢訳よりも早い。従来諸説をすべて否定することになる。ここは強調してもいい。

闕文文『晚清報刊上の翻譯小説』(済南・齐鲁書社2013.5)の80頁と275-276頁に書かれている。

虞靈の翻譯ならば、樽目録第5版に収録済みだ。劉永文編『晚清小説目録』(上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11)にもとづいた。該当箇所を掲げる。説明の都合上、すでに公開している樽目録第6版ではないからご注意を。

Z0224 *

戦後(短篇小説)

虞靈訳

『時報』1910.2.18

[劉晩150]



劉永文目録の150頁に記載されている。それを根拠にしたという意味だ。

見なおせば「登第4頁」とある。劉永文は、作品が新聞の第4面に掲載していると書くことができた。実物で確認しているとわかる。ただし、該目録によれば、1回かぎりの掲載になる。それしか日付がないからだ。さらに、上にはドーデ原作「最後の授業」だとは書いていない。原文に明記されていないものは、劉永文も記録のしようがないだろう。

そういう状況だった。文文の指摘が貴重だと理解できる。

ただし、『時報』連載の時間について、文文の記述がゆれている。これは困った。

その1 80頁はこうだ。「宣統三年(1911)一月七日至一月十五」とある。角書不記。

その2 275頁はこうだ。「宣統二年一月七日至一月十五」とある。新暦になおせば1910年2月16-24日にあたる。同じく角書不記。

両者とも月日は同じだ。しかし、おかしなことに年が一致しない。宣統二年と三年では、一年の違いがある。文文の該書には、いくつかの記述違いが見られる。そのなかのひとつにすぎない。

私は、ふたつの理由から『時報』掲載は宣統二年(1910)だと判断した。

理由1 劉永文『晚清小説目録』150頁には、1910年2月18号と書いてある。前述のとおり、劉は実物で確認しているらしい。ただし、ここだけ見ると連載であることはわからない。また、文文の示す日付とも異なる。新聞掲載については、理由がよくわからないが研究者によって日付の記述が一致しないことがある。不思議といえばそうだが。しかし、連載の一部であろうとも、存在しているのは事実だと思える。

理由2 該作品が文文の著作275頁に見えるのは、『時報』掲載の小説のひとつとしてだ。各作品を刊行順にならべて説明している。その配列からして、1911年ではなく1910年2月の掲載だと考えられる。

そこまでは、机上の推測で判断できた。あとは、実物をさがして読むだけだ。

だが、今回は簡単にはいかない。作品そのものを見るまでに手間がかかった。

作品にたどりつくまで

虞霊訳「戦後」は、新聞掲載だけで終わった作品らしい。後に作品集などに収録されたという記録が見あたらない。

ドーデ「最後の授業」の最初の漢訳だとわかっていれば、研究者の誰かが言及しただろう。特に韓一宇はフランス文学の漢訳研究では第一人者だ。しかし、著書に作品名をあげていない。文文によってなされた新しい指摘だと私がいう理由だ。

日本の国会図書館が『時報』をマイクロフィルムで所蔵している。ウェブ上では公開していない。ウェブサイトから蔵書目録を検索して

「1910年2月」があることを確認した。月日を指定して複写を依頼する。たしかに受理された。普通は、しばらくして複写が郵送されてくる。

ところが、このたびは違った。なかなか届かない。図書館のウェブサイトから確認すると「複写の可否を確認中です」と表示が出たまま。時間が経過する。なにをどのように確認しているのか、こちらにはまったくわからない。

あまりに時間がかかるから別の方法を考えた。

日本にある中国書籍専門書店を通じて『時報』のフィルムを購入するのだ。大まかに時間を区切った部分を入手できる。過去にそうした経験がある。念のため東京の書店2軒に問い合わせた。そのさい、虞霊訳「戦後」1910年2月16-24日が必要だと知らせる。また、フィルムではなく電脳で読み取ることのできる方式に変換してもらいたいとも。書店を複数にしたのは、そのほうが入手する可能性が高まると単純に考えたからだ。あとから思えば、ムダな努力だった。

1店からの返答は、こうだ。日付単位で指定された部分だけの販売はしない。1巻ならば、CDかDVDにできる。ただし金額は高い、と。書店が示したマイクロは、第32巻(1910.1.26-3.25)だ。日付をみれば、虞霊漢訳作品は含まれている。購入する、と伝えた。しばらくすると、中国から該当作品は掲載されていないと連絡があったというのではないか。不可解なことがあるものだ。私が感じた最初の印象だった。

もう1店からの返答も似たようなものだ。作品は確認できない、と中国大陸の販売元からいつてきたという。なんだろうな。取り次いでくれた日本の書店員も困惑していた。しばらく考えて理解した。製作販売元は中国に1社あるだけだろう。日本の書店が2店ともに同じ中国の業者に問い合わせたのだ。返答がひとつであるのは不思議ではない。

こうして、書店からは入手できないことがわかった。それにしても、新暦で日付が一致しているのにもかかわらず、なぜ掲載が確認できな

いのだろうか。疑問は残る。

国会図書館関西館からようやく連絡があった。該当する作品は掲載されていない、よって依頼を謝絶する、という返答だ。書店からののはなしと同じではないか。

国会図書館といえば、専門家の集団である。彼らが調べて、存在しないという。月日まで明記してある作品にもかかわらずだ。これはどういうことなのか。

今まで普通に図書館の複写サービスを利用してきた。複写禁止の書籍もなかにはある。それは当然だろう。関西館のばあい、複写を謝絶されることが数回あった。申し込みは受理されたが、のちに複写できない資料だと通知がきたのだ。複写不可情報が書目に反映されていなかっただけのこと。ごく少数にすぎない。だが、今回の該当作品がないとは、はじめてである。劉永文は「登第4頁」と書いていた。掲載されていないわけがない。

京都学研都市にある国会図書館関西館に足を運ぶ。京都府南部、奈良県に隣接する場所だ。近鉄電車から奈良交通バスに乗り換えれば建物の正面玄関に到着する。

関西館といえば、山根幸夫(1921-2005、東京女子大学教授)の発言を思い出す。関西館の完成と同時に、国立国会図書館からアジア関係資料を移動させるという計画が発表された。たぶん1990年代の昔だ。山根は、東京から資料を移すことに強く反対した。雑誌『汲古』において文章を掲載し、ついでに罵るのだった。「関西に利用する研究者はいるのか」大変ご立腹の様子だった。

ひさしぶりに訪問すると、以前とはやり方が違っている。建物、その内部、開架資料などの配置にはほとんど変化はない。以前と異なるのは、見た範囲内で(警備員を除いて)係員が全員女性である。その日その時間帯がたまたまそうだったのかもしれない。

基本的変化というのは、すべて電脳を通じて

利用する点だ。いちいち閲覧請求用紙に記号、書名などを自分で記入する必要がなくなった。電腦を通して閲覧請求する。資料が出てきたという知らせも自分が使用している電腦の画面に表示される。以前は、受付場所に置かれた大型映像装置に自分の番号が表示される仕組みだった。電子図書館の方向に進んでいる。といっても、10数年前の英国図書館に追いついただけ*54。

虞靈訊「戦後」は『時報』1910年2月16-24日の連載だとわかっている。マイクロフィルムに、なぜ見あたらないのか。

「(通号4) 1910.02」を読みとり機にかける。目当ての作品がない理由が、即座に判明した。

フィルムの中の箱に記載された「1910年2月」は、1910年が新暦、2月は旧暦なのだ(新暦3.11-4.9に該当する)。新暦で閲覧請求しているのに、出てきたフィルムの中身が旧暦では合致するわけがない。

新暦旧暦混用は中国の習慣だ。日本の国会図書館でもそうなのか。いや、フィルムを作成した業者が新暦旧暦を混用したのだろう。国会図書館は、それをそのまま目録に掲載したにすぎない。『申報』影印本も同じである。

書店を通じて知らせてきた中国製作のマイクロフィルムは、第32巻(1910.1.26-3.25)だ。こちらは新暦らしい。ただし、新暦ならばなぜ該作品が掲載されていないのか。謎のままだ。

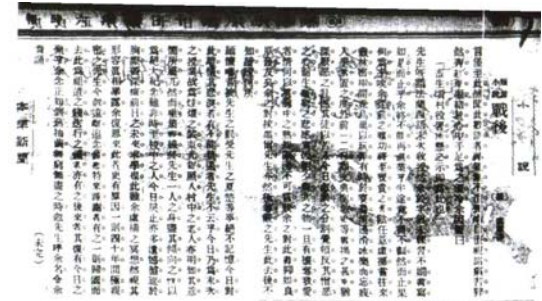
あらためて「宣統二年正月」、関西館では「(通号3) 1910.01」のマイクロフィルムを請求して閲覧した。

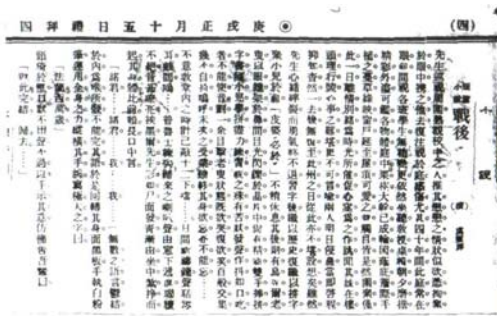
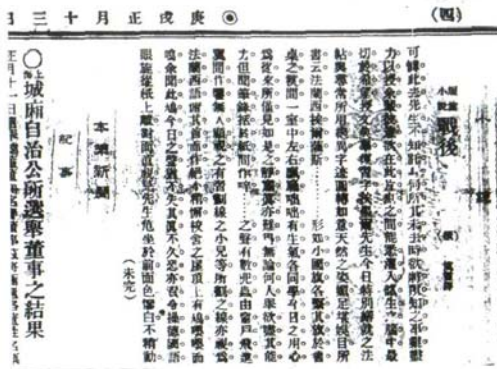
虞靈訊「戦後」は、『時報』において以下のとおり連載されている。

- 宣統二年正月初七日(1910.2.16)
- 正月初九日(1910.2.18)
- 正月初十日(1910.2.19)
- 正月十二日(1910.2.21)
- 正月十三日(1910.2.22)
- 正月十五日(1910.2.24)

6回の連載で回数表示はない。前述のとおり

り原作者、原作についての記載もない。(次回完結)





【注】

- 52) 以下の作品は未見。
- 「最後一課(愛国小説)」(法)多德著 梁蔭曾訳 『工読雑誌』1巻1期 1917.5
[彙 1746]原著者不記[大典440]は上のように多德著とする[韓08-339][韓08-354][劉民231](法)多德著
「末次之課程」(法)多德 ALPHONSE DAUDET 著 段茂瀾訳 『南開思潮』1期 1917.12
[彙 1989][史索二167][韓08-337]ALPHONSE DAUDET“LA DERNIÈRE CLASSE”(“CONTES DU LUNDI”1873)訳文為白話,訳者為該刊総編輯[韓08-354][劉民232]
「最後之課(紫羅蘭庵説集 愛国)」(法)名家桃荅氏原著 周瘦鵬 『新申報』1919.5.17-22
[劉民511]
- 53) 韓一字「陳匪石訳」《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略,『清末小説』第25号2002.12.1。同氏同題『出版史料(叢刊)』第3輯2002.9
- 54) 参照:樽本照雄「清末翻譯小説研究周辺 英国図書館における文献検索の実例」『大阪経済大学教養部紀要』第18号 2000.12.31、145-155頁。要

約:桜井鷗村が翻訳した少年冒険譚シリーズは、英国の作品である。しかし、それらの原作がなにであるか不明であった。シリーズのうちのいくつかは、漢訳されてもいる。その漢訳されている原作を英国図書館で確認するまでを述べる。新しくなった英国図書館の書籍検索の手順についても紹介する。

清末小説から

野間信幸氏よりご教示いただきました。感謝します

- 姚 達兌 晚清伝教士中国助手的身份認同問題 以王韜、管嗣復、蒋敦復为中心 『中国現代文学研究叢刊』2014年第11期(総第184期) 2014.11.15
- 朱 曉江 “新文学”内部的岐見:对“新文明”的不同想像 以梁啓超、胡適、周氏兄弟为中心的考察 『中国現代文学研究叢刊』2014年第11期(総第184期) 2014.11.15
- 吳 曉樵 周作人对晚清德語小説訳作《賣国奴》的評價 『新文学史料』2014年第4期(総第145期)2014.11.22
- 安 凌 解説《伊犁白話報》 『新文学史料』2013年第3期(総第140期) 2013.8.22
- 单 宏軍 晚清新疆域外遊記の新発見:《六日旅行記》 『新文学史料』2013年第3期(総第140期)2013.8.22
- 樽本照雄 清末小説年表の最新成果 陳大康 『中国近代小説編年史』について 『東方』408号 2015.2.5
- 陳 平原選編導読 「作為“繡像小説”的《文明小史》 《<文明小史>与“繡像小説”》導読 『《文明小史》与“繡像小説”』貴陽・貴州出版集團、貴州教育出版社2014.7.1 20世紀中国人的精神生活叢書
- 張 袁月 『晚清吳地小説研究』天津・南開大

- 学出版社2014.10
- 張旭、車樹昇編著 『林紵年譜長編(1852-1924)』福州·海峡出版發行集團、福建教育出版社2014.9
- 李 艷麗 『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書
- 池田智恵 『近代中国における探偵小説の誕生と変遷』早稲田大学出版部2014.11.7 早稲田大学モノグラフ110
- 梁春芳、朱曉軍、胡学彦、陳后揚 『浙江近代圖書出版史研究』北京·學習出版社2014.7
- 姜 荣剛 『晚清小説の变革:中西互動与傳統的內在轉化 以梁啓超為中心』北京·中国社会科学出版社2014.10
- 潘 桂林 『“文学場”之魂 中国近代新小説讀者意識研究』北京·中国社会科学出版社2014.10
- 鄭 麗麗 『風雨“中国夢” 清末新小説中的“救国”想像』北京·中国社会科学出版社2014.10
- 魏紹昌主編 『民国通俗小説書目資料彙編』3冊 上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2014.12

- 黄 霖 (『民国通俗小説書目資料彙編』) 序 魏紹昌主編 上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2014.12
- 寇 振鋒 『訳介与接受 中日近代小説生成時期的影響研究』上海訳文出版社2014.8
- 李冰梅編著 『文学翻譯新視野』北京大学出版社2011.4
- 紀德君、梁冬麗 『黄世仲小説創作研究』北京·社会科学文献出版社2014.10 広府文化研究叢書
- 鄧 大情 『広州与上海 近代小説中の商業都会』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2014.11 中国古代文学双城書系
- 袁進主編 『新文学的先驅 欧化白話文在近代の発生、演变和影響』上海·復旦大学出版社有限公司2014.11
- 惠 萍 『嚴復与近代中国文学变革』北京·社会科学文献出版社2014.11
- 劉蕙孫子女編 『翰墨清芬 劉鶚、劉大紳、劉蕙孫三世手迹輯存』私家版(壹号文化伝播有限公司印刷制作 2014)

